



ARCADIA



# プロローグ 1

---

Et In Arcadia Ego アルカディアにも我はあり

(ニコラ・プッサン／アルカディアの牧人たち)

秋も深まり、夜気は深々と冷え込んでいる。

既に全てのボタンをきっちりと留めているにも関わらず、僅かな隙間からも冷えた夜の空気は入り込んでくる。

私はこげ茶色のジャケットの合わせ目を更に強く握り締めた。

早朝の海岸通りは無人だった。

普段ならこの時間帯でも運送用のトラックぐらいいは通っているはずだが、今日はなぜか、それすら一台も見当たらなかった。

道を挟んだ反対側はまだ暗い海。

私のすぐ右手側は切り立った黄色の崖。

はるか崖の上を見上げると、白けてきた濃紺の空に明けの明星が輝いている。

凧いだ海は穏やかで、潮騒のみが遠慮がちに響く中、私は自分の足音だけをカツンカツンと響かせていた。

歪な半円形に海に迫り出した陸地、その縁に沿うように伸びる国道を歩く。

向かう先はコンビニエンスストア。

崖の向こう側のショッピングモール端にある、24時間営業のコンビニだ。

散歩がてらにと思い立ち、わざわざ家から遠い場所にあるコンビニを選んだのだが、思いのほか時間がかかってしまった。

夜明けのコンビニは目が痛くなるほど眩しかった。

コンビニの戸を少し開けた途端、中から軽薄な流行歌が溢れ出してくる。

頭の弱そうな、しかしそれすら計算で固められた幻想のアイドルが歌う、下手糞で馬鹿みたいなラブソング。

扉の開閉に合わせて鳴るベルの音を聞きつけて、店員が眠そうな目を擦りつつカウンター奥の部屋から現れた。今風に着崩しただらしない服装や髪型から察するに、いかにも不真面目そうな青年だった。

どうせ、陰で居眠りでもしていたのだろう。

仕事をさぼっていた罪悪感からか、やけにこちらを気にしている様子で、しきりに目や口の辺りを擦っていた。

私はドアのすぐ近くにある雑誌棚を眺めて、その中の一冊を手にとった。

それは月刊の音楽雑誌で、今月は知らない国のポストロックのバンドが拍子を飾っている。

別に読みたいわけでもなかったが、なんとなくカゴに入れた。

煙草を一箱。チョコレート。

それから――。

ちょっとした生活用品が並んでいる棚の前を通りかかったとき、私はふと足を止めた。

男性用靴下のすぐ横に、コンドームの箱と並んで無造作に置かれている白い箱。

私はそれを睨みつけた。

箱の前には、黄色の吹き出し型のポップが張られ、大きな字で「注意!!」と書かれていた。  
『理想郷への一本道に、帰り路はありません。良く考えてみましたか？ 間違いではすみません。気をつけましょう!』

何が『気をつけましょう!』だ。

私は心の中で毒づいた。

それなのに、私は吸い寄せられるようについ箱に手を伸ばしてしまった。

自分には必要のないものだと分かっているのに、なぜか箱を手放すことができなかったのだ。  
ほんの僅かな逡巡の後、足はそのままレジへと向かっていた。

レジカウンターの前に立つと、店員は私の顔をちらりと見て、はっきりしないボソボソとした喋り方で「いらっしゃいませ」と呟いた。

商品のバーコードを不器用な手付きで読み込んでいく。

最後に残った白い箱を手を取ったとき、一瞬店員の手が止まった。

そして再びちら、と上目遣いに私を探り見た。

私がじっと見つめ返してやったら、店員は慌てて視線を逸らし、何事もなかったかのように空惚けた顔をしてレジのキィを打った。

「……身分証、見せてもらえますか？」

ぶっきらぼうな調子で言われて、私は無言で財布から免許証を取り出してカウンターに置いた。

免許証の私の写真は、世の中の全てに対して不満を抱えているような酷い仏頂面だったが、多分いつも私はこんな表情をしているのだろう。

店員はレジのバーコードリーダーとは別のスキャン用ハンディリーダーを取り出し、私の免許証に翳した。

「顔写真も撮らせていただきます」

私が返事をする前に、店員はレジに付属されている小型カメラで私の顔も撮った。

音もフラッシュもなかったのも、いつシャッターが押されたのか、カウンターのこちら側からでは良く分からなかった。

「5,690円になります」

コンビニで、しかもたった4点の買い物なのにこんなに高くついてしまうのは、もちろんあの胡散臭い白い箱のせいである。

しかしたった五千円ぽちちであのポップの言う通りに『理想郷』が買えるのだと考えれば、こんなにお買い得なものはないだろう。

アルカディア3。

それが、あの箱の中身である。

私は財布からくしゃくしゃの一万円札を取り出してカウンターに置いた。

店員は緩慢な動きでレジから釣りを取り出す。

それを小銭入れにじゃらりと流し込み、ジープの尻ポケットに財布をねじ込んでさっさと外へ出た。

ドアのすぐ横の自販機で熱いコーヒーを買った。

その場で開けて一口。

人口甘味料の変に甘ったるくて安っぽい味がして、舌を軽く火傷した。

来た道に戻る。

半円形の崖を抜け、途中、ビーチへと向かった。

浜へと続く階段を一步降りてそこに座った。

階段は海風が運んできた砂だらけで、薄灰色のコンクリートのところどころに海草の切れ端やら割れた貝殻が散乱していた。

煙草の封を切って一本啜える。

風が少し出てきたようだ。

掌で風防を作り、苦労して火をつける。

煙は私の口から吐き出されると、風に飛ばされ瞬時に霧散した。

コンビニのビニル袋から白い箱を取り出す。

一見すると胃腸薬や風邪薬の箱のようだ。

白い箱の表面には、事務的で飾り気のない黒のゴシック文字で、

『ARCADIA 3』

とのみ表示されている。

その商品名以外、文字も装飾も一切ない。

商品名の上を指でなぞると箔押し of 微かな凹凸を感じた。

本来、どんな商品であっても販売元に利益が入ってくることを目的として売り出している。

それなのに、この商品からは消費者へのアピールがちっとも感じられない。

理由は簡単、セントラルシティに自主規制を強要されたためである。

販売は許可するが、広告はできるだけ控えろ、という類のお達しがあったのだ。

もっとも、ごちゃごちゃしたデザインで溢れ返る世の中であって、この度を越したシンプルさが却って悪目立ちして見えるのだが……。

きっとパッケージのデザイナーや、デザインにゴーサインを出してしまったセントラルシティの責任者たちは、その事実を目の当たりして「しまった」と舌打ちしていることだろう。

もしかしたら、そのうちデザインは変更されるかもしれないな、と思った。

だけど、目立つにしろ目立たないにしろ、そんなことはあまり関係ないのかもしれない。

何にせよ今現在、世界中でこの商品の需要は非常に高いのだから。

裏面を見ると、まず目に飛び込んでくるのは表面の商品名よりも大きな文字が四つ。

『安楽死剤』

これは合法的な死の薬だった。

しかも、いとも容易く手に入る……そう、コンビニにまで置かれているというお手軽さ。

よく嚙んで飲み下せば、胃袋に入って三秒でアルカディア、つまり『理想郷』へ行ける薬だ。

もちろん、現実世界に理想郷なんてあるわけがない。

理想郷が存在するとすれば、そう、それは――。

人々は、天国という不確かな理想郷に縋ってこの薬を手取る。

恐怖も三秒間。

迷いも後悔も三秒間。

そして、もどかしさも三秒間。

全てが三秒で済むなら、それこそ理想的ではないだろうか。

何かを飲み込むように煙草を吸い込んで、注意書きに向かって吐き出した。

どうして買ってしまったのだろう……。

ただの気の迷いでしかなかったが、衝動買いにしては悪趣味過ぎる。

箱を開けてみる。

中は、箱の大きさの割にはスカスカで、その殆どが何もない空洞となっていた。

どんな薬でも必ずついてくるような、六つ折りにされた説明書きが入っており、粟粒のような字で延々と商品説明がされていた。

「死のうとしている憂鬱な奴らの、誰が読むっていうのかしら」

私は呆れてちょっと笑った。

鼻から抜ける嫌な笑いだと、我ながら思った。

箱を斜めにして振ると、ぽろりとビニル素材の薬の包装が転がり出た。

たった3粒、飴玉大の半透明な薬の粒が、個別に並んで入っている。

青と白のマーブル模様。

まるで、ガラスでできた地球の模型のようだ。

死ぬのには一粒で充分。

残りの二粒は、別に道連れを作るためというわけでも、一粒では致死量に至らない肥満者用というわけでもない。

デブでもガリでも、一粒あればポックリ逝ける。

残りの二つは補助だった。

最初の一粒で躊躇して、吐き出してしまう者が多いのだ。

三粒あれば、二度失敗しても大丈夫。

なんて親切なのだろう！

けれど、本気で死にたいと思っている人間が二度も失敗するのだろうか……？

私だったら一発で決める、と思った。

一発だ。

それで駄目だったとしたら、もう一生自殺なんて考えないだろう。

家に帰ると、珍しく弟のケンが起きていた。

「おはよう、姉ちゃん」

「今日は早いね」

「姉ちゃんこそ。早朝の散歩なんて、太ったオバサンか老人のすることだろ」

「やめてよ。超失礼なんですけど」

ケンは、スキンヘッドの頭に入ったオニヤンマみたいな蜻蛉のタトゥーを撫でながら、大欠伸をしている。

タトゥーを撫でるのはケンの癖だ。

まるでSF世界の世紀末の不良みたいな格好をしているけれど、普通の大学生だし、普段は性格も温和だ。

「俺、今から老人ホームへボランティアに行くから」

ケンは冷蔵庫から牛乳を取り出し、大きなコップでガブガブ飲んでいる。

「帰り、遅いの？」

「わかんね。デコたちと、遊んでくるかも」

姉ちゃんも来る？ と誘われて、私は首を横に振った。

大した年の差はないけれど、彼らの無茶な遊びについていけるほど若くない。

最近は、何をしてもすぐに疲れてしまうのだ。

ケンは、私が無造作に投げ出しておいたコンビニの袋に目を止めた。

「あ、L.O.Lじゃん。買ってきてくれたの？」

「え？ あ、ああ……うん」

ケンのために買ったわけではなかったが、私はとりあえず頷いた。

喜んで読んでくれるならむしろ無駄にならずに済むからありがたい。

別に自分が読みたくて買ったわけでもなし、アルカディア3と一緒に考えなしに勢いだけで買ってしまった、なんて大人のすることじゃない。なんだか色々と、ちょっと寒過ぎて恥ずかしいので弟には言えなかった。

「何だよ、今月の特集つまんねーなあ」

ケンは文句を言いつつも、結局真剣な顔でパラパラとページを捲っていたが、ふとコンビニ袋の中に残っていた白い箱に気付き、眉間に皺を寄せた。

「げえ。アルカディアじゃん」

汚いものでも抓むかのような仕草で、箱を顔の前まで持ち上げた。

そして、私に鋭い視線を向けた。

「姉ちゃん、死ぬの？」

「死なないよ」

「こんなモン買ってさ、どういうつもりだよ。もういいよ、アルカディア行きは、オヤジとオフクロだけで充分なんだけど」



「ちょっと両親を殺した実物を見てみたかっただけだよ。使おうなんて思うわけないじゃん」

「ハッ、酔狂」

ケンはずを箱をテーブルに放ると「死ぬときは、前もって早めに言ってよ」と背中越しに呟いて、バスルームへと行ってしまった。

私はケンの置きっぱなしにしたコップに牛乳を注ぎ足して、一息に飲み干した。

飲み終わって顔を上げたら、大きなゲップが出た。

部屋に戻り、そのまま一眠りした。

とはいえ、ほんの一時間ほどしか眠れなかった。

昔はいくらでも眠っていたらというのに。

疲れやすさのこともあるし、身体が既に老化の第一段階に足を突っ込んでいるのを感じる。

若いと言えるのは二十三歳までだ、とケンは言う。

その言葉には絶対に反論することに決めているが、でも、やたら早く目が覚めてしまう日が連日続いてしまうようなときと、一日遅れで筋肉痛がやって来るときには認めざるを得ない。

着替えようと立ち上がり、サイドテーブルの上に置いた白い箱が視界に入ってそういえば、と思い出した。

.....また変なものを買ってしまったんだっけ。

私は箱を開け、ベルトに取り付けるタイプの携帯用ピルケースに一粒だけアルカディア3を入れた。

後はゴミ箱に捨ててしまった。

アルカディア3は、常備薬の白い頭痛薬、黄色の避妊薬、真っ赤なマルチビタミンカプセルと並んだ中で一際目立ってキュートに見えた。

このデザインのポップさは、死への恐怖を紛らわせるためだろうか。

でも、そんなことはどうでも良くて、私はピルケースの色合いが可愛らしくなったことに満足し、自分のセンスの良さを心の中で自画自賛した。

部屋着の小汚い白いTシャツを黒のタンクトップに着替え、髪をアップに纏めた。

上に羽織るのは、朝と同じこげ茶色のジャケット。

首にシルバーのネックレス。

胡麻粒のように小さなダイヤが控えめに光っているそれは、元カレからプレゼントされたものだった。

ピカピカだったシルバーのチェーンは、使っているうちにうっすら黒ずんできて、徐々に私の肌に馴染んできた。

元カレも、そうなるはずだった。

怒っているわけでもないのに、いつも不貞腐れたような顔をしている男だった。

始めのうちは取っ付き難かったが、慣れてみればそこにすら愛嬌を感じた。

ケンは「思考の方向性が根っこから合わない」と言って陰で舌を出していたけれど、私とは笑いのツボも合っていたし、相性も良かったと思う。

しかしそんな彼も、もう私の傍にはいない。

ある日突然、アルカディア3であっけなく逝ってしまった。

あまりにも突然のことだったので、私はわけが分からなかった。

アルカディア3での近親者の自殺は、父と母に続いて3回目だったので、こんなのはあんまりだ、と数日の間は発狂したように泣き叫んでいた。

死の原因が何だったのか、私は何も知らなかった。

それらしい話は何一つ聞いてなかったし、遺品の中からも原因が書かれた日記などは見つからなかったらしい。

事件の線も疑われたが、アルカディア3の購入記録があったのと、アルカディアの説明書に付属されているダイイングメッセージカードに

「死にます」

と一言だけ書かれていたのが、あっさり自殺認定された決め手になったらしい。

なぜ私に一言も言ってくれなかったのだろう。

私は愛されてなかったのだろうか。

しばらくの間はかなり腹立たしく、そして悲しかった。色んなことを妄想しては、一人悔やんでいたし、元カレのことを憎みすらしたが、今は恨んでいない。

付き合っているから、愛しているからといって、全てを相手に曝け出すことのできる人間ばかりではないのだと、私はそう思い込むことによって半ば強制的に諦めようとしたのかもしれない。

恨み続け、悔やみ続けられるほど私は強くないのだ。

死んでしまった元カレのことを思い出しながら、今日のプランを考えた。

今日は休日。特にまだ予定は立てていない。

久しぶりに墓地にでも行ってみようか。お墓参りというやつだ。

街の中心にある公会堂の地下に納骨堂がある。

今では、地表に墓を作って死人を埋めるなどという土地の無駄使いはしない。

そんなことをしていたら、地表の全てが墓地になってしまうだろう。

今時の埋葬は、骨の一かけらだけを認識番号とバーコードの刻み込まれたマッチ箱サイズの鉄の箱に入れ、納骨堂に収めるのである。

残りは完全な灰になるまで燃やし、山に散布してしまう。

緑化のための肥料として、人の身体もリサイクルされる。

気持ち悪いと言う人もいるけれど、私はそのシステムが嫌いではない。

一昔前のイメージで言えば、墓だの納骨堂だのはじめじめしていて陰気で薄暗い、薄気味の悪い場所であったのだろうが、現在の納骨堂はすっきりしている。

無機質で白くてシンプルで、まるで何かの研究室みたいだ。

しかしそれでも納骨堂付近で「幽霊を見た」なんていう怪談話は後を絶たない。

おかしなものだ。

洗濯物を干し、部屋を軽く掃除してから街まで歩いた。

ポケットにはウォークマン。

耳にコードレスのヘッドフォンをつけていたけれど、再生スイッチは切ってあった。

もちろん音楽は何も流れない。

遠くで鳴っている海鳴りと車のエンジン音が、壁一枚隔てたように籠って聞こえてる。

音を鳴らしていなくても、ヘッドフォンをつけているだけで自分の周りに一つ防御壁を築き上げたような安心感が生まれる。

もちろんそれは幻想に過ぎないけれど、私の精神は他人の評価ほど頑丈じゃないし、時々変に小心になるので、見せかけだけでも鎧を着ておかないと、いざというときすぐにポッキリ折れてしまいそうな気がして怖いのだ。

気力散漫に歩いていたら、ガソリンスタンドの前で清掃ロボットとぶつかりそうになった。

私はよろけた勢いで転んでしまったが、すぐにロボットが手を差し伸べてくれた。

「ありがとう」

礼を言って立ち上がると、ロボットは微笑んで軽く会釈した。

そのロボットは20代後半の男性タイプの形状をしており、肌は小麦色で歯が真っ白だった。

彼らは皆、優しくて礼儀正しい。

彼らの欠点や倫理的な問題点ばかりを指摘して、やいのやいのと騒ぎ立てるロボット反対派の人々もいるけれど、例えプログラムによって作り出された人格だとしても私は全く気にならない。

昨今、世界の人口はどんどん減少する傾向にあった。

それに合わせて、人間の生活と心の隙間を埋めようとするかのように、人間そっくりに造られたロボットの数は増え続けていた。

街を歩いていると、ロボットが真面目に働き人間と同じように生活している光景をよく見かける。

動きが少しだけギクシャクしているので、近付けば人間かロボットかの区別ぐらいはつくが、しかしバージョンアップを繰り返してもう何年かしたら、外見だけでは区別がつかなくなるだろう。

だが、そんなロボットたちの数を足しても、街に人間の姿は少なかった。

世界的に地下街が発展してきているので、地表を歩く人が少ないというのも原因の一つではあるが、地下に潜っている人々の数を含めても、それでもやはり人の姿は少ない。

特に中年層の姿が見当たらなかった。

彼らは皆、アルカディア3の大流行に乗かって日常から逃げ出してしまった。

このコンビニエンスな死の薬が作り出されたのは、十五年前。

薬を一般発売しても良い、という風に法律が改正されたのは八年前。

それ以来この薬は、一際頑固な宗教によって拒否されている一部の地域を除いて、全世界のコンビニ、スーパー、薬局に置かれるようになった。

長いこと掛かったとはいえ、よくもまあこれほど反社会的な薬が承認されたものだと思う。

当然のことだが、倫理的に問題のある死の薬に反対する声は多かった。

発表された当時は、世界中から大きな非難を浴びていた。

それが、曖昧ながらも賛成の手を挙げる人間が徐々に増えてきたのはいつ頃からだったろうか

。気が付けば、自ら死を選ぶという選択肢があってもいいのではないか、自由とはそういうものではないだろうか、という声がじわじわと世界中に蔓延していった。

それまでも、安楽死というものが全くなかったというわけではない。

法律に則った、病院内での医師の手によるものならば、ずっと以前から行われてきた。

しかし、これほどお手軽な死はありえなかった。

勢いに任せて死ぬなどという短絡的なことがあってはならない、と皆が口を揃えて言った。

何よりも、犯罪に利用される危険性が散々指摘されていたのだが、それでも結果的に法的承認に漕ぎ着いてしまったという事実には、本当に驚いた。

どうしてそうなったのか、私のような一般人には分からない。

もしかしたら、世界の裏の部分で大きな取引や密約、計画が密かに進行していたのかもしれない。

噂話はリアルでもネットでも散々飛び交っていて、私も数え切れないほど耳にしたはずなのだが、今となっては全く思い出せない。

思い出せないというよりも、どうでも良かったのかもしれない。

世界の裏の部分なんて私には直接関係ないし、日々の生活の忙しさのせいもあり、そんな深い

ところまで想像してみようとは思わなかった。

それ以前に、他に考えるべき物事が私には多すぎるのだ。

ただ、そんな面倒くさがりの私でも、いつの間にか世界中の首脳たちが渋々といった顔を装いつつもゴーサイン出し、その後はあれよあれよという間に街のあちこちでこの薬を見るようになったという一連の経過はよく覚えている。

そして爆発的に流行したのが5年前。

アルカディア3のせいで世界人口の二十分の一が失われた。

もちろん、大騒ぎになった。

取り締まりや発売停止を訴える声が四方八方から上がった。

しかしおよそ一年間かけて大流行が徐々に落ち着いていくのと同時に、いつの間にか政府内での反対論はうやむやにされ、立ち消えになってしまった。

多分皆が疲れていたのではないだろうか、と思う。

疲れていたから、お手軽なりセット方法を受け入れてしまった。

世界中が疲れていたのだ。

私だって疲れている。

でも、私の両親はもっと疲れていたらしい。

私にもケンにも何も言わず、まず父が、それからしばらくして後を追うように母がアルカディア3を使用した。

父が浮気をしていたのも、母が新興宗教にのめり込んで多額の財産を注ぎ込んでいたのも、私とケンがその事実を知ったのは葬式の後だった。

後始末は本当に大変だった。

父の葬式では、浮気相手がやってきて母に掴み掛かって罵倒するし、母の葬式では新興宗教の上部の人間がやってきて、偽の遺言書で残ったうちの財産を全部持っていこうとした。

母がすっかりその宗教にお布施として上納してしまったせいで、財産などあまり残らなかったけれど、私とケンは弁護士を雇って徹底抗戦したので、僅かばかりの生命保険金と家は死守することができた。

薄情な気もするが、しかし蓋を開けてみれば大概そんなものだ。

それぞれが悩みを抱えているが、一番重要なことは外には漏らさない。

漏らしているうちはまだ大丈夫。

本当に厄介なのは、溜め込んで溜め込んで……溜め切れなくなって大爆発を起こした時だ。

周囲はその爆発によって初めて事実を目の当たりにするが、爆発した後ではもう全てが遅いのだから。

どうして吐き出せずに溜め込んでしまうのだろうか。

保身のため？

あるいはプライドのためだろうか。

しかし漏らさないからこそ、それら負のエレルギーは昇華されることなくどんどん蓄積し、そのうち「死にたい」なんて簡単に考えるようになってしまうのだ。

――あるいは却って、何もないから死にたくなるのだろうか？

安寧を求める人。

刺激を求める人。

リセットを求める理由は人それぞれなのだろうが、共通しているのは今現在のこの状況、この日常を抜け出したいという願望だ。

願ったところで、どうにもならない願いだというのに……。

いくらアルカディアを夢見たって、現実にはどこへも行けやしない。

死んだ先にはきっと何もない。真っ暗闇すら広がっていない。

だって、暗闇を暗闇と認識できるだけの思考能力も消えてしまうのだから。

心の底では分かっているのだろうに、それでも人々はアルカディア3を易々と飲み込んでしまう

。

夢見ても手に入らない理想郷ならば、夢見ることをやめてしまえ。

夢見る機能を止めてしまえ。

三秒後には、もう理想を追い求めることも、現実の苦渋を舐めることもない――。

そう思って、アルカディア3を噛むのだろうか。

今の世の中、死への恐怖なんて、ティッシュペーパーよりも薄くて軽い。

セントラルシティの世論調査によると、自分への執着心が著しく低下している刹那的傾向に世の中全体が染まりつつあるらしい。

もちろん、いつの時代でもそうであるように、最も刹那主義に飲まれやすいのは青い理想論を掲げた若者だろう。

しかし、実際の自殺率は中年層の方が勝っている。

確固たる人生設計を心に描いた堅実的なミドルシニアであっても、だからこそ一旦安穩の日常から転がり出してしまうと、墮ちるのは短絡的な若者よりも遥かに早いのだろう。

まあ、こんな風にドキュメント番組で手に入れた情報を、すまし顔で他人事のように語っていても、本当は私だって多かれ少なかれその要因を持っていることは認めざるを得ない。

でも、だからと言ってそれをはっきりと認めてしまうのは、自分で自分を軽んじて見ているような気がしてとても嫌だった。

私は街の中心部へと向かった。

清々しい初秋の空は高く、そして深い青色だった。

白銀の雲が、撫で付けたように幾筋か流れている。

蜻蛉が空の高いところを飛んでいた。

青空に胡麻粒を巻き散らかしたようだ。

ケンの頭のオニヤンマを連想した。

彼は今頃、年寄り相手にボランティアに励んでいるのだろうか。

蜻蛉よりも更に高い空を、陽を受けて焼けるように光りながらシャトルが一機飛んでいた。

私が生まれ育ったこの街は、田舎と言うには大きすぎる、都会と言うには裏寂れた、そんな中途半端でつまらない街だ。

外を歩く人は少ない。

先程も言ったように、人口が少ない上に便利なメトロが街を縦横無尽に走っていて、地表を歩いて移動するよりも格段に便利なので、皆それを使っている。

切符代はガソリン代よりもはるかに安い。

途中、雑貨屋に寄ってガムと小型電池、ビールを一缶買った。

商品の入ったビニル袋を手にはら下げて、ガムをクチャクチャ噛みながら公会堂まで歩く。

入り口で、年老いた管理人の男性とディスプレイ越しに会話した。

半年ほど前に来たときとは違う管理人だった。

「中、入りたいんですけど」

市民コードを提示すると、管理人は「物好きだね」とボソボソ呟いて、地下納骨堂へのロックを解いてくれた。

「骨なんてしまってあるところへ入って、何が楽しいんだい」

「昔は墓参りっていう習慣があったって聞きましたよ」

「今は誰もそんな人間はおらんね」

「私、おじさんが管理人になる前にも、何度も来てますけど……そんなに誰も来ないんですか？」

モニターの中の管理人は、面白くなさそうに眉根を寄せて鼻を鳴らした。

私の問いには答えない。

どうやら、会話を楽しむ気なんて更々なさそうである。

管理人は「問題を起こさないでくれよ」と低い声で私に釘を刺した。

私は素直に頷いた。

死というネガティブなイメージを打ち消そうとしているのか、それとも死を際立たせる生という有機質なイメージを掻き消そうとしているのか、納骨堂はいつも異様なくらいに明るく白く無機質だ。

壁も、床も廊下も、そして骨の箱がずらりと並ぶ棚も。

両親の番号の棚を探す。

十分ほどウロウロ探してようやく見つけ出した。

入り口のドアからは大分離れた場所にある、足元に近い棚だった。

何度も来ているはずなのに、通路と棚が延々と同じように並んでいると、それだけでもう圧倒されて、誰の骨が一体どの辺にあるのかなんてすっかり忘れてしまう。

強化ガラスの中に収められた、両親の骨の入った鉄の箱を見つめる。

隣同士に並べられた両親の遺骨。

生きていたときには二人並ぶことなど滅多になかったろうに、死んでようやく夫婦らしくなった。

皮肉なものだ。

しゃがみ込んで下を向いたら、髪の毛が一房鼻の穴に掛かって大きなくしゃみが出た。

くしゃみは納骨堂全体に反響し、無機質な堂内に有機質な一瞬の振動を与えた。



私だけが生きている……。

少しだけ孤独を感じた。

ビールの蓋を開ける。

プシュッ、と軽く音がしたが、振らないように気を付けていたので中の液体が噴き出ることにはなかった。

キンキンに冷えているわけではなかったが、まだ喉に心地良いくらいの冷たさは残っていた。飲みながら、今度は元カレの遺骨を探す。

両親の遺骨の位置が目印となったので、比較的すんなりと見つけることができた。

喉が渴いていたので、軽いビールがとても美味しい。

喉を鳴らして一気に飲んで、最後にほんのちょっとだけ、ガラス越しに彼の骨箱に掛けてやった。

どうやら私は少し感傷的になっているようだった。

いくら生前の彼がビール好きだったとはいえ、骨に掛けてやったところで、死人は嬉しがりもしないだろう。

私も彼も、死後の世界なんて全く信じない人間だったのだから。

私はビールがそこまで好きなわけではない。

ここに持ってきて、一人でガブガブ飲んだのだから、本当は彼がビールを好きだったという理由からなのだ。

もともと、ビールなんて腹が膨れるからむしろ嫌いだった。

喉に突き刺さる炭酸の刺激と苦味は心地良いので、最初の一口だけは好きなのだが、逆に言えば一口で飽きてしまう。

そして、残りはいつも彼にあげてしまっていた。

でも今は蓋を開けたら最後、自分で最後まで飲まなくてはならない。

残飯処理班はもういない。

私は頑張って一缶飲み干して、空になった缶をこっそり棚の下に隠した。

そして、小型電池をポケットに突っ込み、ビニル袋も邪魔臭かったので丸めて捨ててしまった。

そのまま何食わぬ顔をして、納骨堂を出ようとしたが、しかし、一部始終は監視カメラでチェックされていたので、またもやモニター越しに例の管理人と話すはめになった。

「あんた。納骨堂は飲食禁止だよ。それから、ゴミは持ち帰ってくれ」

私は作り笑いで肩を竦めた。

一端納骨堂に戻り、言われた通りに空き缶とビニル袋を拾った。

モニターに翳して見せたら、管理人はむっつりした顔のまま頷いた。

外へ出ると、ほんの少しの間地下へ潜っていただけのつもりだったのに、いつの間にか陽は傾き、空は水色から橙色へのグラデーションに変化していた。

街の向こうの岩山が、太陽に染まって灰とオレンジ色の斑模様になっていた。

所々に、木々が岩肌にしがみつくように生えている。

遠くから見ると、アイスクリームにトッピングされたチョコスプレーのようだ。

少し風が出てきた。

鼻先が冷えて、ムズムズする。

夕飯はどうしようか。

さっき飲んだビールがまだ胃袋内を占拠していて、あまり腹はすいていなかった。

ただ、アルコールに刺激されて物凄くトイレに行きたくなったので、公会堂の裏手にあるメキシコ料理の安っぽいチェーン店へ慌てて駆け込んだ。

もじもじしながらオーダーし、トイレへ飛び込む。

我慢は極限、漏らす一歩手前だった。

だから、ただのおしっこの排泄一つで、人生至上最大の難問をクリアしたかのような爽快感と幸福感に浸ることができた。

ほっと溜息をつき、一瞬「もうやり残したことなどない」と思えるくらい満ち足りた気持ちになったけれど、そんな自分がすぐに馬鹿馬鹿しくなった。

席に戻ると、トイレの長い私を待ち構えていたかのように、タコスとビールがやって来た。

サルサソースを垂らしながら、タコスに齧り付く。

客足はまばらだし、人目を気にしてお上品に食べる必要もなかった。

私のことなど、誰も見ていない。

明日は仕事だという現実や、職場の嫌な上司の顔などを連鎖的に思い出しつつ、ひたすらむしゃむしゃと食べた。

腹は減っていないのに、アルコールを摂取した脳は思いの外食べ物を受け入れてくれる。

食後の一服をふかしていたら、偶然にも窓の外をケンが通り掛かった。

友人たちと談笑しながら、大型バイクを重そうに押している。

ケンに負けず劣らず、彼の友人たちも奇抜なファッションに身を包んでいた。

死んだ両親が見たら、さぞ嘆くことだろう。

私はすぐ窓際の席に陣取っていたので、窓越しに大きく手を振ってケンに合図した。

ケンは気付かなかったが、ケンの友人の一人が私に気付き、こちらを指差した。

振り返ったケンは私を確認すると、バイクのスタンドを立てて道端に停め、片手を上げて近寄ってきた。

「姉ちゃん、何してんの」

窓ガラス越しのこもった音質のケンの声が尋ねた。

何してるって、レストランに入っているのだから食事をしているのに決まっているだろうに、ケンは考えもなく口先だけでよく喋る。

窓のすぐ傍まで来て、ケンは窓のロックを指差した。

外せ、という意味だろう。

ロックを解除すると、ケンは観音開きの窓を全開にして身を乗り出してきた。

「今さあ、丁度どっか入って夕飯食おうとしてたんだよね。腹減ってたァ。なんか残ってない？」

食べかけのポテトの皿を差し出すと、ケンは何チャップをベッタリつけて、あっという間に食い尽くしてしまった。

店員が嫌そうな顔でこちらを見ているので気まずい。

「ケン、何やってんの」

道の向こうから、バイクに跨ったケンの仲間たちが呼んでいる。

ケンはペロリと舌を出して「姉ちゃんがいんの」と怒鳴り返した。

「エーコさあん、コンチハ」

誰かと思えば、ケンと幼なじみのデコだった。

アメリカ系のデコの本名はポールとかいう名前だったような気がするが、漫画のように立派な富士額の持ち主なので、誰もがデコと呼ぶ。

デコは、オレンジ色の髪を抓んでは引っ張る作業を繰り返しつつ、ニコニコ笑っている。

彼は髪が柔らかいので、ワックスで立ててもすぐに萎れてしまうのをいつも気にしている。

そんな下らない気遣いがまだ子供じみていて、ちょっと可愛い。

もう辺りは雀色だったが、デコのオレンジ色の髪は、取り残された夕日のように暗がりの中で目立っていた。

私はデコに手を振った。

「どこで遊んでたの？」

「いや、今までずっとボランティア」

「随分頑張ってたのね、偉い偉い」

「まーこれから遊びに行くんだけどね」

ケンは私のビールを飲み干して、顎をしゃくって背後を示した。

5、6人の少年たちが、デコと喋っている。

こんな連中が老人ホームで無償ボランティアをしているなんて、想像してみると滑稽すぎる。

私は吹き出したが、ケンはきょとんとしていた。

「ベガに行くんだけど、姉ちゃんも来る？ どうせ暇なんだろう」

「クラブかあ。朝までいんでしょ？ 途中で帰るにしても、あんたらずっと遊んでんじゃ、足がないし……気ままな学生とは違って、お姉さんは明日、仕事があるのですよ」

「平気だろ、その辺で軽く寝とけば。朝になったら、誰かの後ろに乗ってきゃいいじゃん」

「あんた、軽く言うねけどね」

私はちょっと唸ったが、すぐに「まあ、良いか」と頷いてしまった。

明日は仕事があるといったって、今はまだ日曜日。

私たちのような小市民は、毎日あくせく汗水たらして、休日のために働いているのだ。

それなのに、そのせっかくの休日に明日の仕事の心配するなんて、悲しすぎる。

スタンドを立てたケンのバイクには、腕が折れそうなほどスリムな黒人の女の子が跨っている

。

目がぱっちりしていて、ハムスターのような顔をした美人だった。

「姉ちゃんも行くってさァ」

ケンが友人たちに怒鳴った。

友人たちはニヤニヤ笑って私に会釈する。

私も笑って片手を上げた。

「夕飯、どうすんだよ」

デコがケンに問う。

「もう良いよ。ベガにも食べ物ぐらいあるだろ」

ケンは私から奪ったフライドポテトをこっそり食べたので空腹もおさまっているのだろうが、全く自分勝手な奴である。

腹ペコのデコはええ、と言って不服そうな表情を浮かべたが、ケンはそれを無視してバイクのエンジンを掛けてしまった。

ケンのせわしない所は父親譲りだ。

私は空いていたデコのバイクの後ろに跨った。

「エーコさん、お久しぶりっすね」

デコは舌が長いのだろうか、それとも舌裏を繋ぐ筋が短いのだろうか、濁舌が悪く、呂律が回らない変な喋り方をする。

甲高い声を張り上げて、年中酔っ払っているみたいだ。

「僕ウ、今日大変だったんすよ。老人ホームで、マツカタのジイさんのギックリ腰がー」

「へえ。本当に、ちゃんとボランティアやってんだ」

「うエ、もしかして嘘ついてると思ってたんすか」

「そんなことないよ。ホラ、危ないんだから、前向いてよ」

私が耳元で怒鳴ると、デコがラジャー、と答えてエンジンをふかした。

ガクン、と軽い衝撃の後、急加速。

私は思わず猿のように叫ぶ。

バイクはハイウェイを山沿いに走り、街を抜けた。

ヘルメットの中で、髪が頭皮に刺さってチクチク痒くなった。

しかし、デコの腰に手を回しているのだから、ヘルメットの中に手を突っ込んで搔くわけにもいかない。

イライラしたが、少し我慢していたら平気になった。

街を抜けて五分ほどで『ステーション・ベガ』へ着いた。

暗い荒野の中に、カフェバーと燃料屋と共に、離れ小島のようにぽつんと建っているクラブだ

。外観は小ぢんまりとしているのだが、地下3階まであって、1階よりも地下階のフロアの方が格段に広い。

「今日は何？」

「ダブステップだって」

ヘルメットを外したデコが、ぺちゃんこになった髪を必死で捻り上げながら言う。

「俺はパンクのライブとかEDMの方がいいんだけどなあ」

「何がパンクよ。あんたは脳味噌がパンクしてんでしょ」

私がにやつきながらそう言うと、しかしケンも顔を顰めて冷たい口調で私を貶した。

「そのジョーク最悪。はい、オヤジ出現」

ケンはいつだって、つまらないジョークに手厳しい。

一方、デコは馬鹿単純なので、ケラケラ笑っていた。

ケンと黒人の少女が腕を絡めて先に行く。

ケンの友人たちを挟んで、私とデコが続いた。

入り口脇で、チケットを買った。扉を開けると、そのすぐ横で、どんぐりみたいな麻の帽子を被った男が、無表情にチケットを切っていた。

私も並んで彼にチケットを差し出すと、切った半券を手渡され、右手の甲に乱暴にスタンプを押された。

子供の落書きみたいな宇宙ステーションの真ん中に「ステーション・ベガ」と書いてある。

これをつけていないと、一端外に出たら入れてもらえなくなるので、トイレで手を洗うときなどは消えないように注意しなければならない。

入り口で立ち止まり、煙草に火をつけた。

中は暗い。

照明なんて、お愛想程度にしかついていない。

すぐにケンとはぐれてしまった。

デコがひょろりと背の高い少年に呼び止められる。

どうやら知り合いのようだ。優しいデコは私を一人にすることを気にしたが、私は大丈夫だ、と片手を上げて、一人地下へと下りた。

換気扇の効きが弱く、地下は煙で濛々としていた。

喫煙者の肩身が頗る狭くなった現在、これほどまでに不健康に煙が充満している空間は珍しいだろう。

恐らく、この街の中で一、二を争う空気の悪さだ。

私は、自分が煙草を吸うくせに、他人の吐き出した煙は大嫌いなわがまま喫煙者なので、少し不愉快になった。

野郎臭い黒いダブステップというよりもポスト・ダブステップの若干切ない感じの曲が掛かっていて、低音が若干音割れしている。

あまり飲み過ぎないようにしよう、と思いつつも、とりあえず景気付けにカウンターでテキーラのショットを煽った。

喉がカッと焼けて、一気に酔いが回った。

調子に乗って、続けてもう一杯。

一人になってしまったので、ちょっとテンションを上げたかった。

たいして酒に強いわけでもないのに、急に度数の高いアルコールを体に入れたので、身体が熱を帯び、心臓の鼓動が高鳴る。

反対に、思考は急激に冷たく冴え渡り（もちろん、そんな気分になるだけで、実際はお馬鹿さんのままなのだろうけれど）、まるで自分が孤高の哲学者にでもなったかのような誇大妄想に駆られた。

指に「曲がれ」と命令し、実際に曲がるまでに、ほんの僅かなタイムラグ。

脳と身体との間に立ちはだかる壁を、一際強く感じる瞬間だ。

ロボットの身体を、司令室から脳がコントロールしているようだ。

私は、昼間のロボットを思い出していた。

彼らも、こんな感じに生きている、いや動いているのだろうか。

しかし、そんな記憶もすぐにアルコールの波の彼方へと流されていってしまった。

更にもう一杯テキーラを受け取って、人込みの中を歩く。

髪の高い白人女性が、官能的にくねくねと腰を振って踊っていて、肘が私の肩に当たった。

テキーラが少し毀れて、私の手の甲に流れる。

舌を出して舐め取ったら、濡れた手に鼻息が掛かってすう、と冷たくなった。



地下フロアは中央で二つに分かれていて、壁や仕切りはないのだが、床に一段差がつけられている。

手前のフロアには、ピンクとオレンジの照明にシルバーの内装。メタリックな銀の簾がジャラジャラと揺れていて、綺麗だが時々邪魔だった。

奥のフロアには、緑と白の照明。

真っ白にペイントされた可哀想な観葉植物たちが、あちらこちらに陰を作っていて、そこではよく男女がこっそりキスしたりしていた。

もちろん、陰に入るまでもなく、あけっぴろげにいちゃついている人間も山ほどいるが、ここでは取り立てて珍しい光景ではない。

フロアの境目、壁際の段の所に腰を下ろした。壁にもたれて、フロアに轟めき合い踊り狂う人々の群れを眺める。

音楽も歓声もグラスの音も、全てが遠く聞こえた。

音なしのヘッドフォンをしている時と同じ気分だった。

踊っている間は、何もかも忘れていられる。

仲間と騒いで酒を呷っている間は、頭を空っぽにしていられる。

だから、クラブはこれほど盛況している。

皆、色々なものを一時的に忘れたがっている。

明日は仕事や勉強が待っているのだが、今、その現実を思い出している人は殆どいないだろう。

思い出している人は一一。

ベルトを探して、ピルケースを前に回した。

中を確認してみる。

小さな地球の模型は、ちゃんと入っていた。

思い出している人は……

思い出している人は……思い出している人は……。

私はこめかみを押さえた。

死んでしまった彼氏の顔が、脳裏を過ぎった。

怒っているわけでもないのに、いつも不貞腐れたような顔をしている男だった。

はじめのうちは取っ付き難かったが、慣れてみれば愛嬌すら感じた。

思い出している人、忘れることが出来ない人は、きっと……。

それが、あの人だったのだ。

そして、両親だったのだ。

甲高い歓声がすぐ近くで響いた。5、6人の集団が、興奮した様子で飛び上がったりしている。カンパニー、と大声が響いて、割れてしまうのではないかと思われるほどの勢いでグラスが鳴った。

と、床の上を小さな白いものが、私に向かって一直線に転がってきた。

どうやら、葉のようだ。

それは私の靴の爪先に当たって、何度か床に円を描き、カタカタと震えるように動いて止まった。

指先で摘み上げる。

小さな錠剤だ。

「あれ、俺の『ハネ』、何処行った？」

「落としたのかよ。こんなに暗きゃ、見つかんねえぞ」

さっき乾杯していた集団が、ざわざわ騒いでいる。

彼らの話を盗み聞きして、私は悟った。手の中にあるこの錠剤は『ハネ』と呼ばれるドラッグだ。

「あーあ、高いのに損した」

「自分が悪いんだ、諦めろよ。俺のはやらねーかな」

「ケチ野郎。いいよ、もっかい買ってくっから」

一人の男が集団から離れて、階段を上っていった。

私はクスリを目の前まで持ち上げてみた。

綿埃が付着していたので、息を吹きかけて落とした。

舌の上に乗せる。

味はない。

ガリガリと軽く噛み砕いたら、粉っぽく微かに苦い味が口の中に広がった。

テキーラを一気に呷る。

喉を、熱い液体と共に噛み砕き切れなかった小さな異物が通り抜けていく。

10分ほどで効いてきた。

人々が何十にもダブって見える。

そして遠近感がのっぺりとなくなってしまうたり、反対に3D眼鏡をかけているかのように浮き出して見えたりするのだ。

時折、首筋を何かに撫ぜられるような感触に襲われ、その度にゾワゾワと全身の毛が逆立った

。

少し寒い。

けれど、脳味噌と目玉だけがカッカと燃えているように熱い。

鳴り響く音楽が、いつの間にか密教の読経のように聞こえ始めた。

陰気な低い声と、リンゴンリンゴンという鐘の音。

時々、ハーピイの奇声が合唱している。

化け物のような大きな顔が、私の右から左へ。

かと思えば、豆粒のような小人が浮かれ騒いでいる。

獣のように鼻が突き出た人間が私を睨んだ。

足が針のように細いピエロ。

わけの分からない、異形の姿をした人々。

皆で、私を嘲笑っている。

知らん顔をして踊り狂っている。

卑猥な言葉と聖書の言葉を、同時に叫んで飛び上がっている。

そのうちに、原色の細かな光が、眼球の端のほうから中心へ向かって、パチパチとスパークしだした。

綺麗だ。

とても綺麗だ。

私はうっとりとしてそれを眺めていた。

誰かが肩に触れ、何事かを耳元で囁いてきたけれど、無視してしまった。

自分自身のいかれて研ぎ澄まされた感覚のみに身体を預け、夢の中を漂っていた。

やがて、近くにいた誰かの気配もなくなった。

それどころか、すぐ側にたくさんの人がいるはずなのに、何故か皆が遠い所へ行ってしまった

かのような、孤独な気分になった。

私は騒がしいこの空間の中で、独りぼっちになった。

突然、空が見たくなかった。

クラブ内の澁んだ空気に吐き気を催した。

外の空気が吸いたくて溜まらなくなり、壁に手を当て身体を支え、難儀しながら立ち上がる。

足元が覚束ない。

頭は冴えているのに、身体がまるで言うことを聞かない。

司令塔からの回線が全て遮断されてしまったようだ。

アルコールの数倍は酷い。

しかし、難儀すればするほど、外へ出たいという欲求は高まるばかりだった。

冷や汗まみれになって何度も他人にぶつかりながら、なんとか階段まで辿り着く。

手摺を必死になって掴んで、這い蹲るようして歩き、やっとのことで上っていく。

「エーコさん、エーコさん」

どこかでデコが私を呼ぶ声がした。

すぐに辺りを見回してみたが、きょとんとした表情の、耳の飛び出た可愛らしい宇宙人ばかりが私の周囲を囲んでいて、デコの姿は見つからなかった。

息苦しさが限界に来ていたので、仕方なくデコを探すのにさっさと見切りをつけて、再び外を目指す。

一階フロアの階段付近に点る、鋭く白いLEDの豆電球の光が、天国への入り口に思えた。

すぐに上り切ったのか。それとも何十分ももがいていたのか。

時間の感覚すら曖昧な今の状況では分からない。

しかしとにかく、永久とも思えた苦難の旅路の果てに、漸く一階フロアの出口まで辿り着いた。

。

「大丈夫ですか」

声が聞こえた。

恐らく、入り口付近で酔っ払い連中を見張っているガードマン・ロボットだろう。

私は微笑んで大丈夫です、と答えたが、その声はまるで他人のもののように聞こえた。

微笑みがきちんとガードマンに届いているのかさえ微妙だ。

もう少し。

力の籠らない手に持てる限りの集中力を注ぎ込み、ドアノブを握る。

あと少し。

この扉を開ければ、私は助かるのだ。

ここにはいけない。

ここにはダメだ。

臭い煙に飲み込まれ、モンスターに囲まれてしまう――。

外に出た瞬間、全ての因果から開放されたような気分になった。

なんて爽やかな空気。

なんて優しい風。

暗闇が私を抱擁し、抱き上げてクラブの外壁のところに座らせてくれた。

私は誰もいない空間に向かってありがとう、と言った。

返事が無いので、空を見上げる。

銀河が渦を巻いていた。

何万個もの銀河が、静かに静かに広がっていくのが見えた。

全てが遠退いていく。

私を中心にして、この大地も、空も命も、手の届かない場所へと蝶の羽の形に広がっていく。

それは、宇宙の構造。

そして、アルカディアへの道標。

どこへ行くの？

私を置いて、どこへ行くの？

暗闇から、答えが帰って来た。

それは、ケンの声に少し似ていた。

だけど、両親の声にも、前の彼氏の声にも聞こえた。

アルカディアだよ。

アルカディアしか、見えないんだよ。

.....そうか。

アルカディアに決まっているね。

皆、そこへ行ってしまいうんだものね。

納得しながらも、急に悲しくなってくる。

皆、私を置いて逝ってしまう。

再び急に、原色のスパーク。

そこまでしか、覚えていない。

いや、覚えているとかいないとか、それ以前に、この記憶が確かなものなんて確証は、これっぽっちもない。

ただでさえ不安定な脳という記憶装置に、ドラッグの力が加えられていたのだから。

男のマンションは、私の住む街の中でもこれまで足を踏み入れたことのない区画にあった。海と山の位置からみると、どうやら私の家とは反対側の区域のようだ。

知らない土地ではあったが、心細くはなかった。

別に言語の通じない土地に置き去りにされたわけではないのである。

地下へ潜りさえすれば、街にはメトロが縦横無尽に走っているから、簡単にどこへだって行ける。

ただ、時計を見たら既に11時を過ぎていて、会社の始業時間には完全に遅刻だった。

大嫌いな女上司の陰険に歪む口元を思い出し、胸がムカついてきた。

会社に着くと、案の定、ブランド物で装飾品の全てを固めた完全無欠のキャリアウーマン、ミス・ケイトは、マシンのディスプレイに視線を向けたまま、私の無能さを無感情に述べ立てた。

彼女のそんな攻撃は、激昂して引っ叩かれる以上に辛い。

計算高い彼女は、いつだって私を確実に仕留める。

悔しいことだが、私はどうしたってへこまされてしまうのだ。

「今日も遅いのね。今月、何回目かしら」

「...2回目です」

「いいえ。4回目でしょう。1分でも遅れたら、それは遅刻というのよね」

「はい」

「あなた、時間と金とは同じ価値がある、という言葉をご存知？」

「聞いたことはありますけれど.....必ずしもそうだとは思っていません」

うっかり口答えをしてしまい、しまった、と思った。肩を竦めて彼女を見る。

彼女は、マシンから一瞬だけ視線を外し、目を細めて私を睨んだ。

肉食動物が獲物を狙う時の目。

しかし、一秒もしないですぐに視線はマシンへ戻る。

まるで、私のことなんて見る価値もないのだ、とでも言いたげな動きだ。

これが一番心にこたえる。

「確かにあなたの言う通り、必ずしもそうではないわね。でもね、一つだけ言っておくわ。少なくとも、ここではそうなの。時間とお金とは同等の価値があるのよ。そして、ここにいたいのなら、あなたはここの掟に従わなけりゃならないの。それが嫌なら、さっさとお辞めなさい。代わりはいくらでもいるんだから。もっとも、あなただけのお金がなけりゃ生きていけないのだから、そう簡単に仕事を失うわけにはいかないだろうけれど」

私は口を噤んで床をじっと見ていた。

そして、彼女が台詞を切ったのを確認して、言葉の合間に割り込むように、素早く「すみませんでした」と謝った。

ミス・ケイトはまだ何か言いたげな物足りない表情をしていたが、私はピリオドを打つように

もう一度謝って、彼女の再攻撃を上手くかわし、自分のデスクへと戻った。

溜息をついて、PCを立ち上げる。

今日は、仕事をするような気分には到底なれそうにないのだが、だからといって家に帰って寝るわけにはいかない。

彼女の言うとおりに、生きていく為にはある程度の金が必要だし、金を稼ぐには、やりたくない仕事だって失うわけにはいかないのだ。

転職という手もあるが、再就職先を探すだけの気力など今の私にはない。

だから、入社面接のときに一応「正社員採用有り」ということになっていても、それは建前で、恐らく永久にバイト扱いでこき使われるのだろうと分かっている、この仕事を続けているのだ。

取り敢えず生きていける金があれば、それでいい。

それだけで満足だ。

他に、特に大それた望みなんてないのだから。

私の仕事はテープ起こしである。雑

誌や書籍の編集者が取材等で録音した音声を、コンピュータに入力する仕事。

自動的に音声をテキストに起こしてくれるソフトを使っても、人間の言葉の持ついい加減さや曖昧さまでは、機械の判断を百パーセント信用することはできない。

感情が関係してくるものになると、やはり人間の感覚がまだまだ必要なのだ。

特に、対談モノなどになると、唸り声やら笑い声などが多くなるので、コンピューターは大混乱する。

ヘッドフォンをつけて、ディスプレイに表示されたコンピュータの判断文章と音声とをチェックしていく。

時折、キィを叩いて文章を修正。

地味で気の遠くなるような作業だ。

でも、仕事をしている間は誰とも喋らなくて済むし、余計なことも考えずに済む。

私の頭の中は、いつも色々な映像で轟めき合っている。

思い出すまいとしても、脳の自動的な働きなのだから抵抗は無駄である。

でも、工作中だけは、何も浮かんでこない。

仕事のみ集中することができる。

昨夜の出来事も、死んでしまった人たちの顔も、溜まりに溜まっている洗濯物のことも、何も思い出したりしなかった。

途中、昼休みと十五分程度の午後の休憩を挟んで、黙々と仕事をこなした。

週明けと週末はいつも、仕事がどっと押し寄せてくる。

週末ならば、翌日の休みを励みに頑張る気にもなるが、週明けは最悪だ。

一週間分の憂鬱を押し殺して、我慢しなければならぬ。

五時になってやっと仕事から解放された私は、一人でビルから外へ出た。

途中、同僚の女の子たちに食事に誘われたけれど、週の初めから彼女らの暢気でつまらないお



喋りに混ざる気にはなれなかった。

女の子たちは一瞬むっとして、それからちょっと皮肉ったらしい調子で、「あらァ、エーコさんは忙しいから、中々都合が合わないわね。ざーんねん」と言った。

私は自然に見える作り笑いを心掛け「ごめんね」と謝った。

このくらいの社交辞令なら、私にだってできる。

地下鉄への入り口を目指して歩いていると、聞き覚えのある排気音が近付いてきた。  
それは、私のすぐ横で停止した。

「姉ちゃん」

ケンだった。

ゴーグルをヘルメットの上に押し上げて、私を見た。

「どうしたの」

「暇だったから、迎えに来た」

「珍しい。どういう風の吹き回しよ」

「別に」

ケンは、バイクの後部シートの横に括りつけてあったヘルメットを外し、私に放った。

それを被って、ケンの後ろに跨る。

「今日は、あのブラックビューティーの彼女は？」

「ああ、メリッサ？ バイトだよ。別に、毎日遊んでるわけじゃないんだからね」

「あそう。毎日遊んでると思ってた」

「昨日、どこ行ってたの？」

ケンに尋ねられて、私は言葉に詰まった。

「……別に。友達んち」

つかなくてもいい嘘をつく。

微かな罪悪感。

「デコ、探してたよ。エーコさんエーコさんって煩かった」

「ああ、そりゃ悪いことしたわね」

「弟分泣かすなよ」

「私の弟は、あんただけよ」

「それ聞いたら、デコ泣くよ」

私は小首を傾げて澄まし顔を作る。

「デコったら、あんたよりよっぽど可愛いわ」

「あーあ。よく言う」

「あの子、私のこと好きなのかしら」

ケンが大袈裟に吹き出した。

「好きィ？ 姉ちゃんは、ただのタチの悪い先輩だろ。後輩泣かせの」

ケンは目を細めて私を睨んだ。

私は口を尖らせる。

「たちの悪いって何がよ」

「酔っぱらってやり過ぎる悪ふざけ。俺ら後輩組がその尻拭いしてんだよ」

ケンのバイクがエンジンをふかした。

グオン、グオンと二回鳴らして、勢いよく発進。

夕焼けが、バイクのハンドルに反射して眩しい。バイクは大通りに出て、いつもとは違う方向へと曲がった。家に帰る道ではない。

「どこ行くの？」

エンジン音が煩いので、ケンの耳元で怒鳴る。

ケンは少し首を捻って、隣町、と怒鳴り返した。

「何の用事？」

「ただのドライブ」

危ないので、それ以上は尋ねなかった。

バイクは、私が昨日の早朝に通った崖沿いの道を走っていた。

何となく口を尖らせる。朝の、あの店員の男との会話を思い出していた。

車体を傾けスピードも落とさぬまま、崖の湾曲に沿ってバイクは走る。

ケンの腰にしっかり手を回し、気付かれないように溜息をついた。

なんだか気分がすっきりしない。

一番バイクを停めて欲しくない場所でケンがエンジンを止めたので、私は思わず声を荒げた。

「ちょっと、何でここに停めるの！」

ケンは驚いて私を見る。

「煙草買うから。え、何？」

「いや……何でもない」

私は気まずさに視線を漂わせ、へへへ、と笑った。

ケンは気持ち悪そうな顔をして首を傾げ、店の中へ入っていった。

あの男がいたら嫌だな。

私はガラス越しに、こっそりと中を覗いた。

いた！

しかも、目が合ってしまった。

げんなりして、バイクの所まで戻った。舌を打って、沿石に座り込む。

覗き込んだりしなければ良かった。

「なんてついてないんだろう……」

足音が近寄ってくる。

ケンか、それとも、あの男か。

「あのさ」

声を聞いて、私は再び舌を打った。

顔を上げれば、目の前に立っているのはあの男だ。

「こんにちは」

「仕事しなよ」

「今日はもう一人いるから平気」

中途半端な笑みを浮かべ、Gパンのポケットに手を突っ込んだまま、私を見下ろしている。

私は不機嫌な顔を崩さなかった。

でも、顔を上げてみて初めて気付いたのだが、自分は思ったよりも、この男が嫌でないようだった。

少なくとも、ミス・ケイトと向かい合っているときよりは、マシだ。

「あれ、彼氏？」

まだコンビニの中のケンを振り返り、男が聞いた。

「どうでもいいでしょ」

「凄いね。頭」

「……何の用？」

「朝、中途半端にバイバイしちゃったから」

「中途半端？ 私はもう、限界だったけど」

男は図々しく私の横に座り込んだ。

私はわざと、男の顔を見なかった。

「仕事に戻りなよ」

「ちょっとだけ。そんなに嫌わなくてもいいだろ」

「あんた、自分の立場分かってんの？ レイプされたも同然なのよ、私」

男は、ああねえ、とのっぺりした口調で呟き、肩を竦めた。

「だから、悪かったよ。もうしないってば」

「しない以前に、あんたとは一生会いたくないわね」

「そんなこと言うなよ。ここで会ったも何かの縁だろ」

「切るわ、そんな縁は」

「そんなこと言わずにさ、コーラでも飲もうよ」

男は、腰に巻いたコンビニのエプロンのポケットから、小さなコーラの瓶を二つ取り出し、蓋を開けてから手渡してきた。

腹立たしいくらいに良く冷えていて、美味しかった。

夕日を浴びながら飲むコーラは格別だ、なんて小学生みたいなことを考えつつ、煙草に火をつける。

一番バイクを停めて欲しくない場所でケンがエンジンを止めたので、私は思わず声を荒げた。

「ちょっと、何でここに停めるの！」

ケンは驚いて私を見る。

「煙草買うから。え、何？」

「いや……何でもない」

私は気まずさに視線を漂わせ、へへへ、と笑った。

ケンは気持ち悪そうな顔をして首を傾げ、店の中へ入っていった。

あの男がいたら嫌だな。

私はガラス越しに、こっそりと中を覗いた。

いた！

しかも、目が合ってしまった。

げんなりして、バイクの所まで戻った。舌を打って、沿石に座り込む。

覗き込んだりしなければ良かった。

「なんてついてないんだろう……」

足音が近寄ってくる。

ケンか、それとも、あの男か。

「あのさ」

声を聞いて、私は再び舌を打った。

顔を上げれば、目の前に立っているのはあの男だ。

「こんにちは」

「仕事しなよ」

「今日はもう一人いるから平気」

中途半端な笑みを浮かべ、Gパンのポケットに手を突っ込んだまま、私を見下ろしている。

私は不機嫌な顔を崩さなかった。

でも、顔を上げてみて初めて気付いたのだが、自分は思ったよりも、この男が嫌でないようだった。

少なくとも、ミス・ケイトと向かい合っているときよりは、マシだ。

「あれ、彼氏？」

まだコンビニの中のケンを振り返り、男が聞いた。

「どうでもいいでしょ」

「凄いね。頭」

「……何の用？」

「朝、中途半端にバイバイしちゃったから」

「中途半端？ 私はもう、限界だったけど」

男は図々しく私の横に座り込んだ。

私はわざと、男の顔を見なかった。

「仕事に戻りなよ」

「ちょっとだけ。そんなに嫌わなくてもいいだろ」

「あんた、自分の立場分かってんの？ レイプされたも同然なのよ、私」

男は、ああねえ、とのっぺりした口調で呟き、肩を竦めた。

「だから、悪かったよ。もうしないってば」

「しない以前に、あんたとは一生会いたくないわね」

「そんなこと言うなよ。ここで会ったも何かの縁だろ」

「切るわ、そんな縁は」

「そんなこと言わずにさ、コーラでも飲もうよ」

男は、腰に巻いたコンビニのエプロンのポケットから、小さなコーラの瓶を二つ取り出し、蓋を開けてから手渡してきた。

腹立たしいくらいに良く冷えていて、美味しかった。

夕日を浴びながら飲むコーラは格別だ、なんて小学生みたいなことを考えつつ、煙草に火をつける。

「夕日、綺麗だなあ」

男は暢気に言う。

私は心を読まれたような気がして、多少どきりとした。

横目でちら、と男を伺い見る。

何を考えているんだか、さっぱり分からない。

「俺は、嬉しいよ。こうしてもう一度、昨日やった女の子に会えるなんて」

最悪な物言いだ。

もう少しマシな言い方はないのだろうか。

「引っ叩かれないの？」

「叩いて気が済むんなら、叩いていいよ」

私は利き手の右手の指に挟んだ煙草を左手に持ち替えて、空いた右手で思い切り男の頬を打った。

ピタン、と大きな音がして、男が一瞬跳ね上がった。

そして、頬を押さえて、地面とキスできるぐらいにまで顔を落とした。

「痛エッ……」

煙草を右手に持ち直し顔を上げたら、ケンがコンビニのドアを開けるところだった。

「姉ちゃん、お待たせ」

「待ったわよオ」

コーラを飲み干し、空き瓶を男に押し付ける。

立ち上がって、ヘルメットを被った。

ケンは、蹲って唸っている男を見て、怪訝な顔をする。

「どうしたの、この人」

「知らない」

「知らないって、一緒にジュース飲んでたじゃないか。姉ちゃんの知り合いなんだろう」

「違うわ。行こ」

渋るケンの背中を押して、バイクに乗り込む。

ケンがエンジンをふかそうとしたら、男が顔を上げた。

私の手の後がくっきり残っているにも関わらず、もう、何事もなかったかのような平気な顔をしていた。

「何だよ、弟君か」

「はい、弟です」

ケンが片手を上げ、にこりと答える。

「今度、メシでも食いに行こうよ。もちろん、弟君じゃなくて、お姉さん、君の方」

「あれ、残念。姉ちゃん、ホラ、誘われてるよ」

ケンが振り向いた。

私は顔を背ける。

「行かない」

「俺、本当に嬉しかったんだって、さっき」

男が手を広げて言った。

「私は嬉しくなんてないわ」

「君が嬉しくなくても、俺は嬉しかったの。昨晚も、さっきも、どっちもね」

「姉ちゃん、もしかして口説かれてんの？」

「うん」

私の代わりに、男が答えた。

ケンが、ニヤニヤしながら私を見た。

ヘルメットの上からケンの頭を強く叩いたが、痛いのは私の手ばかりだ。

「じゃあ、明日、ここで待ってるから。夜7時」

「来ないよ。金ないし」

「奢るよ」

「……」

私はフン、と鼻を鳴らして、私を男とを交互にちらちら見ては笑っているケンの足を蹴飛ばした。

ケンはまだ口元をにやつかせながら、エンジンを掛けた。

男は私に手を振った。

私は無言で、ケンの背中に顔を埋めた。

「姉ちゃん、背中くすぐったい」

「いいから、早く出してよ」

「へいへーい」

徐々に風が冷たくなってきた。

夜が近付いてきている。

群青色の海の彼方から、寄せ来る波もいつの間にか高い。

満ち潮だ。

ケンの背中に左頬を預け、雀色の風景を見ていた。

東の空には宵の明星が光っている。

太陽は沈んでいて、薄暗い海沿いの町は実際の温度よりも寒々しく見えた。

「姉ちゃん、メシ、どうする」

「あんまりお腹すいてない」

「じゃあ、もうちょっと走ってもいい？」

「いいけど、どこまで？」

ケンが振り向いた。

ゴーグルが暗くて、目元は見えない。

「あと十分。そうしたら帰るよ」

私は頷いた。

できれば十五分といわず、ずっと走っていたい。

バイクで走るのは好きだ。

流れる景色も、頬にダイレクトに感じる空気の流れも、心地良い振動も。

十分なんてあっという間だった。

隣町の工業コンビナートまで着た私たちは、バイクを降りて埠頭の先端まで黙って歩いた。

父が生きていた頃、父とケンは休日になるとよくここへ釣りをしに来ていた。

ケンは淡白そうに見えて、中々どうして思い出に固執したり、人情に熱かったりするところがある。

些細な出来事にも、意味を、そして過去の情景を無理矢理リンクさせようとする。

そうすることが、生きている者にとっての義務である、と思い込んでいるみたいだ。

不毛な行為だとは思うけれど、姉の私の目から見ると、それが可愛く見えるときもたまにある。

今が、まさにその瞬間。

「ケン、パパとよく来てたよね」

「ああ。オヤジ、ここ好きだったみたい。俺らが生まれる前は、母ちゃんと来てたらしいよ。デートの度に」

「うわあ。それってどうなの。なんか、色気ないねえ」



「うちの両親に、色気も糞もあるかよ」

二人で吹き出す。

デコが、ガムを取り出し口に放った。

私も手を出したが、残念ながらケンの口の中にあるのが最後の一個だった。

「私も、小さい頃に数回だけ、連れてきてもらったことあるなあ。まあ、あんたが生まれてからは、バトンタッチしちゃったけどさ。パパったら、きっと、女の私より男のあんたの方が良かったんだ。酷い話」

「しょうがねーよ。男同士だもん」

「あっそ。でもまあ、この埠頭もさ、あんなに愛してくれた人がいなくなっちゃって、寂しかろうね」

「寂しくないよ。コンクリート製のモンが、寂しがるかよ」

「あ、そっか。男の埠頭は、あんたが立派に受け継いでるしねえ。デコが言ってたわ。デートの度に来てんでしょ？ 彼女もウンザリなんじゃないの」

ケンは、目をぎょろりと動かして、オニヤンマのような怖い顔をした。

デコのやつ、と声に出さずに呟く様子も、捕まえたオニヤンマの口に、無理矢理草の葉を押し込んだときのようだった。

口をパクパク開閉させながら、歯を剥き出して異物を噛み砕く。

ケンは、お調子者のお喋りデコを想像しながら、噛み砕いてしまっているのだろう。

「恥ずかしがることないじゃん。今度は、私も誘ってよ」

「馬鹿じゃねえの。俺は、そんな干渉に浸るような男じゃないよ」

「ふうん」

私はニヤニヤして、煙草に火をつけた。

ケンが横から手を伸ばしてきて、私の煙草入れから一本掠め取る。

「もーらい」

「バカケン！ 自分の吸えよ」

「俺、今煙草代もケチってんだよね」

「バイクには金掛けてるじゃん」

「今は違う。ちゃんと、金貯めてるの」

「どうして？」

ケンは、口元をモゴモゴさせながら俯いた。煙草を吸ったり、鼻先を擦ってみたり、一頻り躊躇するような素振りを見せた後、実は、と改まったように切り出した。

恐らく、照れを隠したかったのだろうが、姉の私にしてみれば、一目瞭然。

というよりも、却って逆効果だ。

隠そうとすればするほど浮き出てくる。

「来年、学校卒業するだろ？ そしたら、西の大陸、歩いて横断しようと思って」

「一人で？」

「いや、もちろんガイドロボットは借りてくけど」

「ふうん……」

「それで、いろんな街を歩いて、食べ物ガイドを書くんだ」

私は吹き出した。

「探検記じゃないの？」

「いや、食べ物ガイド。もう、K出版の編集の人と、話つけてあんの」

私は目を丸めた。

「凄いじゃん」

「なんか、俺が記事かいてるクラブ8のフライヤーあるだろ？ あれ見て、OKサイン出してくれたんだ」

「ああ、四つ折のヤツでしょ？ そういや、あそこにも、あんた街のグルメガイド書いてたわね。クラブ帰りの早朝カフェメニュー、だっけ？」

「うん、それぞれ。でも、旅の資金が出るわけじゃないから。だから今、セコセコと貯めてるんだよ」

「へえ」

ケンは、もじもじしながら再び俯く。私はケンの肩を強く押した。

「あのさあ、それって、照れるようなことなの？」

「照れてないよ」

「照れてるよ」

「照れてないってば!!」

「あ、そう。可愛くない弟」

ケンの頭の蜻蛉をパチンと叩いて私がそう言うと、ケンは蜻蛉をさすりながら、私の頬を抓った。

「ケッ、可愛くない姉ちゃん」

私は笑って、ケンのジャケットを引いた。

「じゃあ、可愛くない同士で、仲良くお家へ帰りましょう」

「ええ、帰りましょう、お姉さま」

ケンがふざけて、しなをつくってそう言うので、私はぶっと吹き出した。

調子に乗ったケンは更に、女の動きをデフォルメした目線と手付きで、クネクネ動いて笑わせようとする。

私はヒイヒイと悲鳴のような笑い声を上げつつ、埠頭を駆けた。

気持ちの悪いなよなよ走りで、ケンが待ってェ、と叫んで追い駆けて来る。

先にバイクに飛び付いた私は、ヘルメットを装着し、運転席に陣取った。

「帰りは、私の運転ね」

まんまと出し抜いてやったような気になって、得意げにケンを振り返る。

「ええ、やだよ。姉ちゃんの運転、乱暴なんだもん」

ケンが不満を漏らしたが、私は聞く耳持たずだ。

どこの家だって、兄弟姉妹のパワーバランスはこんなものだろう。

年長者は大概、年上と言う立場を乱用し、年少者は理不尽さに口を尖らせつつも、結局上の意見を聞いてしまうのだ。

諦めというものは、大人になる過程で覚える大きな武器だが、それを覚える時期から言えば、弟妹の方が兄姉よりもずっと大人になる時期が早いのもかもしれない。

可哀想なことだ。

ケンが渋々後部シートに座ったのを確認し、ロケットスタートで飛び出す。

ケンの身体がガクンと仰け反るのを感じた。走りが安定してきてからも、私の腰に回すケンの節くれ立った手は、小動物のように震えている。

そんなに私の運転が信用できないのだろうか、とちょっと腹が立った。

「私はいつだって安全運転だよ」

信号で止まったときに振り向いてそう言ったら、ケンは知ってるよ、と頷いた。

「でも、姉ちゃんが運転してるっていう、ただそれだけのことが、一番信用ならないんだよな」

「私のドライビングテクニックはどう評価してくれるのよ」

「至って普通。人間性に難アリ」

「感じ悪いわ」

ケンを小突いて前を向くと、丁度信号が青に変わったところだった。

地面を蹴り上げ、発進した。

職場では、私は完全に浮いている

あまり喋らないし、皆の輪に積極的に入ろうとしないせいだ。

職場以外の場所では普通に喋る。

大して実のある会話などしないし、大方は内容のあまりない、下らない無駄口ばかり叩いているけれど、でも無駄は楽しいものだし、お喋りな自分も嫌いではない。

それならばなぜ職場では喋らないのかというと、何を喋ればいいのか分からなくなってしまうからだ。

職場で飛び交っているのは、相手のご機嫌伺いのための薄っぺらい世間話と、職場内の人間関係に関する噂話ばかりだ。

ただでさえ興味が持てないのだから、どこでどのように口を挟んで会話に混ざれば良いのかなんて、もちろん考える気力なんて湧いてこない。

大体会話に混ざる以前に、聴いている話の内容を頭の中で理解しようとするこすら放棄しているので、結局ぼんやりとザル耳で流し聞きして、会話のリズムに合わせてただ相槌を打つだけになってしまう。

そのため、時折ふいに自分に話を振られると、それまでまったく聞いていなかったことがモロバレになってしまい、皆に白けた視線を向けられて更に気まずい思いをする羽目になる。

だったら最初から、会話になど混ざらない方が良い。

人生は短い。

いつ終わるか分からない。

それなのに、興味のない相手に対して興味がある振りをして、他人に愛想を振り撒いて、限りある貴重な時間とエネルギーを割くなんて、私にはそこまで余力がない。

言い方を変えれば、ただ面倒臭くて我慢ならない、というだけであるが.....。

ケン

「姉ちゃんはワガママだ、皆そう思ってるけどちゃんと我慢してるんだぞ。だから、いい歳こいで大人げないんだ」

と私を馬鹿にする。

でも、だからといって改善しようとか世の中に迎合しようという気も起きない。

確かにただのワガママだろう。

でも、なぜ周りに合わせなければならないのだろうか？

誰が決めたのだろうか？

皆がそれぞれにそんなワガママを言っていたら、何も成り立たなくなる、ともケンに言われたが、じゃあ皆一度私のようにしてみたら良いのではないか、と思った。

それで何か問題が起きたら、その時にその対処策を考えればいいではないか。

やり方なんていくらでもあるのに、結局それをしないのは、皆は我慢して他人に合わせる生き方が本当は“好き”だからだ、と私は解釈している。

そして多分、そんな風に捻くれて考えている私が他人から煙たがられるであろうことや、出る杭は打たれるのも分かっているけれど、打たれることすらどうでも良い。

ただ、私は私のペースで人生を使いたいのだ。

凡庸な日常

小市民的なつまらない生活。

変化のない日々。

私はそれ以上に何も求めている。

ただ、例えばもし自分が死ぬ瞬間、走馬灯のように浮かんでくる過去を振り返り、一瞬のうちに生涯の時間の割り振りを計算してみたとして、不本意ながらに愛想笑いを浮かべて他人にゴマをすっている時間が他の何よりも多かっただらしたら、それこそ居た堪れないではないか。

人にはそれぞれ「ここだけは譲れない」というポイントがあると思うが、私の場合は多分「他人に無駄に合わせたくない」というところなのだろう。

それに、どうせ大した人生ではない。

周囲から白い目で見られたところで、特に今更受けるダメージもない。

他者からの評価の勲章を掲げ、日々を飾り立てる必要もない。

華やかな評価は必要ない。

このままでいい。

昼休み、どこのレストランへ食事に行くか、甲高い声を張り上げ相談している同僚の女性たちの一団の横をすり抜けて、仕事場の部屋を出た。

ドアを右手に曲がろうとしたとき、その中の一人と一瞬目が合った。

名前すら思い出せないその同僚は、蔑むように眉を上げて、ずっと視線を逸らした。

皆が私を陰で何と呼んでいるかは知っている。

「だんまりエーコ」だ。

そして、社内に飛び交っている、私に関する噂も知っている。

誰とでも寝る、バーで男漁りしている、金で男と寝る――概ねそんな類の、私が性的に奔放だという下ネタ的な噂ばかりだった。

もちろん、それらは真実ではない。

私は取り立てて品行方正とは言えないかもしれないけれど、至って平淡な刺激のない毎日を送っている人間だ。

噂されているような大胆な冒険はしないし、したいとも思わない。

それでも噂とは恐ろしいもので、私が沈黙を通せば通すほど、真実なんてそっちのけでどんどん大きく膨らんでいく。

他人の噂話とは、人によっては金も払わず最高に楽しめる、手頃なエンターテインメントみたいなものなのだろう。

だから、本来ならば標的にされたりしたら腹が立って当然なのだろうが、しかし私はと言えば、馬鹿みたいな噂を立てられてムカつく、悔しいという感情すらとっくの昔に失せていた。

どうでも良い。

そればかりか他人事のようにさえ聞こえる。

だから全て放置していた。

全てがどうしても良く思えてくるほど、疲れているのだろうか。

そういえば私はここ数年で、日常の様々な事柄について酷く無気力になっていた。

時々ふと自覚する。

その瞬間が、本当に恐ろしかった。

この状態が悪化すると、アルカディアが目の前にちらつくようになるのだろうか。

現に私は、死にたいとまでは思わないものの、死を恐れる心が以前よりも確実に薄れてきている。

そしてそれは同時に、まるで自分自身の存在までもが薄れてきているように感じられて、私には“死にたがりな自分”になることよりも、むしろそちらの方が恐ろしいのだ。

屋上に出ると、薄日が差しているものの空は薄曇りで、風は冷たかった。

それでも室内の澁んだ空気よりはましだ。

私は出入り口のドアから壁伝いに反対側まで歩いて、そこに座り込んだ。

ポケットからクッキーバーを出して齧った。

チョコレート味のはずなのだが、なんだか工場の機械油みたいな味だがした。

とは言っても、私は機械油なんて食べたことはないのだが、イメージ的にそんな不味さだった

。

しかも、租借するとたちまち粘土のようにニチャニチャしてきて喉にベッタリ張り付くので、食べ難いことこの上ない。

やたらと水を飲んで、粘着質なクッキーバーの残骸を飲み込もうと躍起になっていたら、出入り口のドアノブが音を立てた。

どうやら、寒い屋上へ出てみようという物好きは私だけではないようである。

顔を合わせるのも面倒なので、私はそのまま壁の裏側に隠れていることにした。

コンクリートに接触している尻部分が既に冷え始めていたので、本当は早く中へ入りたかったのだが仕方がない。

出てきた人間は二人だった。

足音で、片方は革靴のような硬い靴を履いた男、片方はヒールを履いた女だということが分かった。

「寒いな」

聞き覚えのある声。

部長の顔が浮かんだ。

歯にこびり付いたクッキーを舌で必死に剥がし取りながら、私はこっそり壁の角から声の方を覗き見た。

こげ茶色の上品なスーツ。

やはり部長だ。

そして、その隣には髪をアップに纏めた女。

白地に淡い水色と茶色の細い線が入ったシャツに、タイトな黒のミニスカート。

ほっそりと美しい曲線の足。

あんな綺麗な足の女性なんてうちの職場にいたのだろうか、などと一瞬考え込んだが、すぐに女上司だと気付いた。

彼女の足などまじまじと見たことがなかったので、今まで美しさに気付かなかったが、それにしても、今日だって何度も見ているはずの彼女の服の柄すらすっかり忘れてしまうほどインパクトの強い美しい足なんて、ちょっと凄い。

「手短に済ませよう」

部長が言った。

わざと感情を押し殺しているような抑揚のない声。

嫌な予感がした。

ミス・ケイトが何度か咳払いをした。

緊張しているようだ。

「手短に済むのならね」

結構なタイム・ラグの後、ミス・ケイトがそう言った。

部長はわざとらしく笑った。

「もちろん、僕は手短に済ませるつもりだよ」

「あなた、嫌なことを言い出しそうな気がするわ」

私はぞっとした。

聞かなければ良かったと後悔した。

あなた。

あなた、だって。

当たり前のことであるが、私は未だかつて、ミス・ケイトが部長に対して「あなた」なんて呼びかけるのを聞いたためしがない。

あなた。

その三文字で、私は部長とミス・ケイトの関係性について、すっかり理解してしまった。

「君の予想は、概ね当たっているだろうけれど……でも」

「私と別れようって言うの？」

部長は消え入りそうな声で言う。

「でもね、それが僕らにとって、一番いい方法だと思う」

「奥さんと別れるって――別れて、私と結婚するって、そう言っていたじゃない」

ミス・ケイトが金切り声を張り上げた。

建物内への扉は閉まっているものの、それでも階下まで声が聞こえてしまうのではないかと、と全く無関係な第三者であるはずの私が、無駄に肝を冷やしてしまった。

「それは……その場の勢いで言ってしまったんだ。すまない。でも、よく考えてみれば、僕のその言葉が、実際問題としては不可能だということぐらい、利口な君なら分かっている筈だろう」

部長の声は、もう落ち着き払ったいつもの声に戻っていた。

いわゆる、開き直りってやつだ。

沈黙が続いた。

沈黙に耐え切れなくなった私は、煙草に火をつけた。

風向きが変わって、煙の流れが部長たちの方へ行ってしまうかもしれない、私の存在に気付かれてしまうかもしれない、とは思ったが、勝手に話し始めたのは向こうである。

私はただ、偶々ここに座っていて聞こえてしまっただけだし、何も責められるようないわれはない。

むしろ、煙草の煙で第三者の存在に気付いて、この場からさっさと立ち去ってくれれば良いのに。



運が良いのか悪いのか、部長は煙草のにおいに気付いたようだった。

少し焦ったように早口で言った。

「よく考えてみたまえ。すっきり別れたほうがいいんだ。僕は別に、君が愛人だったからといって、変に厄介払いしようとか、そういう意地悪な意思是持ち合わせていないよ。もちろん、君が聞き分けの良い女でいてくれるのならばね」

「……もう、行って」

ミス・ケイトは震える声で言った。

どちらのものだか分からない溜息が聞こえた。

男の靴音が、ビル内へのドアに向かって移動する。

そして、ドアがバタンと鳴った。

それきり、辺りは静かになった。

ミス・ケイトはカンカンに怒っているのだろうなあ、と思った。

この分だとうちの課は、午後は台風並みに荒れそうである。

私はげんなりして肩を落とした。

が、すぐに頭を上げる。

変な音が聞こえる。

最初は聞き取れないくらいのボリュームで、油切れの風見鶏がキイキイ鳴るような音だった。

しかし徐々にはっきりしてくると、それが泣き声だということに気付いた。

「ヒーン、ヒィーン……」

再度そっと覗き見ると、歯を食い縛り、口を半分閉じている状態で、ミス・ケイトは泣いていた。

誰も見ていないのだから、別に泣きたいだけ泣けばいいと思ったけれど、それは彼女のプライドが許さないのだろう。

変に意地を張って泣くのを堪えようとするので、泣き声が馬みたいで滑稽だ。

だが、泣き方にまで頑な意志が現れているミス・ケイトの根性も見上げたものである。

それにしたって、ミス・パーフェクトのちっともパーフェクトでない無様な姿。

信じられないこの状況。

ミス・ケイトの泣き声に合わせて、鈍い頭痛を感じた。

脳が混乱して、理解を拒否しているかのようだ。

私は煙草を捻り消して、両のこめかみを中指でぐいぐいと押した。そして息を大きく吐きながら顔を覆った。

あんまり、見たくなかったな……。

瞼の向こうの光が消える。

真っ暗闇。

その中に、ミス・ケイトの泣き声が幻聴のように響いている。

イライラが募る。頭がおかしくなりそうだ。

瞬間的に、思わず叫び声を上げそうになった。

だが、その直前でミス・ケイトは鼻を睨り上げ、足早に建物の中へと去っていったので、私は叫ばずに済んだ。

数秒間息を止め、ゆっくりと吐く。

ミス・ケイトの泣き声が聞こえなくなると、臨界点まで上昇していた苛立ちも徐々に引いていき、私はようやく落ち着きを取り戻す。

気が付けば、頭上の空には雲がどんよりと広がっていて、夕方のように暗い色に染まっていた。

土臭い、湿った雨の臭いがした。

とばっちりが仕事にも反映されるだろう、と思っていた私の予想は大きく外れた。課に戻ると、ミス・ケイトは何事もなかったかのような何食わぬ顔で仕事をこなしていた。そして私の午後の時間もいつも通り、特にこれといった変化もなく、ただ淡々と過ぎていった。

拍子抜けするのと同時にミス・ケイトに更なる恐怖と微かな尊敬の念が湧いた。

そして夕刻。

会社の終業時刻直前まで、まるで夕立のような激しい雨が降っていたが、今はもう止んでいる。

この季節、イーストサイドのこの地で激しい雨が降るのは珍しい。

職場のビルから外に出ると、玄関先に大きな水溜りができていた。

映し出される天の様子は、高スピードで南へと流れる濃灰色の雲。

雲の切れ目からちらちらと覗く青空は、既に夕焼け色に染まりつつあった。

今朝、目覚めたとき、昨日あの店員が無理やり押し付けてきた約束事を思い出した私は、しかし絶対に行くまいと固く心に誓っていた。

それなのに今、私の足は例のコンビニの方角へと向いている。

職場から例のコンビニまでは歩いて行けるような距離ではなかったので、メトロを乗り継ぎショッピングモールの地下の駅で降りた。

メトロは街を縦横無尽に走っているのだが、時には車やバイクを使うよりも、目的地に着くのが遠回りになってしまったりもする。

車なら10分程度の距離なのに、乗り継ぎ時間も合わせて25分も掛かってしまった。

メトロから地表へと上がると、雨上がりの空気はぐっと冷え込んでいた。

風も切りつける刃物のような冷たさである。

あまりにも寒くて、しかもこんな時に限って薄着だった私は、寒さに耐えられなくなって地下へ舞い戻り、ショッピング街で新しいジャケットを買ってしまった。

首のところが厚手のリブ編みのスタンドカラーになっている、欧米の中年男性が好んで着るような形のジャケットだったが、色は薄緑で、ボタンや胸の部分の切り替えしなどが微妙に凝っていて着てみれば案外女性らしいフォルムだった。

予定外の出費で、ただでさえ余裕のない私の懐具合は更に財政難になってしまったが、いざとなったらケンの財布にたかればいい、と勝手に決めたら気が楽になった。

コンビニ前に到着する頃には、辺りはすっかり暗くなっていた。

秋の陽は沈むのが早い。

あまり使わない携帯電話の時計で確認すると、7時を5分過ぎたところだった。

辺りを見回しても男はいない。

私は鼻を翳り上げて、ほう、と息を吐いた。

蒸気となった息が、一瞬目の前にふんわりと広がった。

昨日の男の言葉が冗談だったように思えてきた。

鵜呑みにして来てしまった自分が馬鹿馬鹿しくなってくる。

しかし、なぜか腹は立たなかった。

――まあ、いいや。

さっさと見切りをつける。

短気な私は、他人を待つのが苦手である。

ケンに電話して迎えに来てもらおう。

それまでショッピングモール内のスタンドで、熱いココアでも飲んでいよう。

確か、ここにはウィンストン・カフェが出店していたはず。

そういえば、今年にはまだ一度もココアを口にしていなかったな。

ドロっと濃厚でマシュマロが浮いたウィンストン・カフェ特製のココアが脳裏に浮かんできて、少しテンションが上がった。

ショッピングモールに戻るべく、歩き出そうとした時だった。

道路側からクラクションが鳴った。

振り返ると、ヘッドライトの光が私の目を刺した。薄暗闇に慣れてしまっていた私の瞳孔には、酷く眩しかった。

目の前に手を翳して様子を窺うが、目が眩んでよく見えない。

「ごめん、待った？」

あの男の声だった。

「乗って」

声に誘われるまま、車に近寄る。

ベージュ色の4ドアだった。

だいぶレトロなデザインだと思ったが、車に疎いので、それがビンテージ物なのかそれとも復刻版の新車なのかは分からない。

自動で助手席のドアが開く。

車の中は快適に温かく、冷えた膝頭が急激な温度変化にぞわぞわと栗立った。

嗅ぎ慣れない匂いがする。

男の香水の匂いだろうか。

それとも車の消臭剤だろうか。

嫌な匂いではなかった。

車内には、よけいな装飾品は一切なかった。

少しだけ、男に対して好感が持てた。

嫌いなニオイがして目障りな物品がごちゃごちゃしている狭所に長時間閉じ込められるのは、拷問みたいなものだ。

「いやあ、来るか来ないか、正直半々だと思ってたんだよね」

男はにやにや笑っている。

折角好感度が上がったところだったのに、その締まりのない笑顔のせいで、やっぱり来なけれ

ば良かった、という後悔の念が沸いてきた。

「……暇だったから。それに今、帰ろうと思ってた」

「じゃあ、危機一髪で到着したってことだよな」

「つーか、普通、待ってない？ 誘っという、相手を待たせんよ」

「悪い悪い。レポート、今日中にまとめないといけなかったから」

私は男の顔を見る。

「学生なの？」

「院生。アカデミーの研究室にいんの」

「研究ねえ。どんな？」

男がちらりと私を見た。

「言っても分からないと思うけど……」

「当ててみせようか。うーん——建築学？ それとも心理学？」

「あ、心理学、当たり。どんなことしてるか、知りたい？」

話が長くなりそうだ。

「いや、別に良い、知りたくない」

私は早々に音を上げる。

この男にそこまで興味はない。

「なんだよ、話させろよ。冷たいなあ」

「別に興味ないわ。つまり、貧乏院生ってことでしょ？ コンビニでバイトして、生活費を稼ぎながら研究の日々。煙草吸っていい？」

「そんなに貧乏じゃないよ。貧乏だったら、君のこと食事になんて誘えないだろ。バイトはさあ、実入りを期待してのことじゃないの。調査だよ調査。アルカディア3の」

一口目の煙を吸い込んでいた私は、男の話の中に思わぬ名前が出てきたので驚いて派手に噎せた。

涙目になりつつ男を見ると、男の方が私よりも驚いた表情でこちらを見ていた。

「大丈夫？」

「何？ 調査って」

「だから、アルカディアをコンビニで買ってく奴はどのくらいいいんのか、購買者の年齢、時間帯、表情や様子とか、他にも色々、事細かにチェックして、統計採ってんの。安楽死剤とそれがもたらす精神的影響の研究、ってヤツよ」

「私もそのデータの中の一人？」

「うん。俺の中では、一番新しいデータ」

悪びれる様子もなく軽い調子で言う男が、段々憎らしくなってくる。

「でもさあ、アレだね。アルカディア買う奴が、全員死にたくてウズウズしてるわけじゃないんだな。君みたいに、興味本位で買ってく人もいるし」

「……」

ここで車から飛び降りてやろうか。

私は内心腸が煮えくり返るような思いで、男を鋭く睨んだ。

「おっかない顔すんなよ。折角これから美味しいもの食べようって時に」

「今日誘ったのも、研究のためなわけ？」

男は目を丸くして、ハンドルを切りながら横目で私を見る。

私は顔を背けた。

「だとしたら、超不愉快なんだけど」

「え、何、そんな風に思ってるの」

「今の話聞かされたら、そう思うに決まってるじゃん」

「大丈夫だよ。俺、プライベートと研究はきっちり分けるタイプだから。個人的な興味と研究的な興味は別。でも、きっかけなんて、どこに落っこってるか分からないだろ」

車がハイウェイから反れて、山へと伸びる細い道へ入った。

今時、舗装されていない砂利道なんて珍しい。

辺りはうっそうと茂る濃い緑。

闇に飲まれて、黒く染まる夜の森。

こんなところに店なんてあるのだろうか。

もしかして、この男、ちょっとヤバイ奴だったりして……。

そのような不安が少し膨らみかけてきたところで、遠くにぽつん、と橙色の温かな光が見えてきた。

男はハンドルを握る右手の人差し指を伸ばし、あそこ、と呟いたが、タイミング悪く車が大きく揺れて、その拍子に舌を噛んでいた。

店の前に車を止める。

駐車場には、3台の車が並んで停まっている。

男は一番林寄りの薄暗がりの中に車を停めた。

ドアを開けさせまいと邪魔をする、悪魔の指先のように鋭く痩せ細った枯れ枝に難儀しつつ外に出ると、途端に冷たい風が襲ってきた。

温かな車内との温度差に鼻がムズムズして、大きなくしゃみが飛び出した。

それは、おかしな形の建物だった。

屋根はこげ茶色で下方に湾曲した傾斜。

頂点が攻撃的なまでに尖っていて、先端には風見鶏の代わりに、尻尾が蛇のような形をした薄気味の悪い装飾の鳥が羽を広げ、ぼんやりとライトアップされていた。

後から知ったが、それはグリフォンという想像上の生物らしい。

魔女の家のような不思議な雰囲気があった。

「早く来いよ」

いつの間にか男は店の戸口に立ち、私を待っている。

小走りに行くとドアを開けて先に入れてくれた。

ドアベルは不思議な旋律で、薄く軽やかな金属音に頭上を仰ぎ見ると、細い筒状の銀のオブジェが見えた。

羽を広げた小さな銀の鳩が、何匹もぶら下がって揺れている。

落ち着き払った富士額ウェイトーが、静かな足取りで私たちを奥の席へと案内する。

店内は狭くはないのだが、しかし至る所に意味不明のオブジェが置かれているので開放感とは程遠い。

旧家の屋根裏部屋を歩いているようだ。

店内には嗅いだことのないオリエンタルなお香の匂いがほんの微かに漂っている。

照明は全て間接照明で、所々に本物の蠟燭が点っている。

歩く度に、蠟燭に映し出された自分自身の影が、直線などどこにもない湾曲した壁にゆらゆら

と揺れ、そのせいで足元まで柔らかく不安定に揺れているような錯覚に陥った。

「……ここ、どういう店なの」

男がコース料理をオーダーし、ウェイターが去っていったのを確認すると、私は男にこっそり尋ねた。

男は食前酒を一口飲んで肩を竦める。

「俺も良く知らない。初めてだから。でも、女の子ってこういう感じ好きでしょ」

「ふうん」

「好きなんだよ。俺リサーチによると」

「へえ」

私の気のない返事に、男はつまらなさそうな顔をして口を窄める。

「なんだよ、のってこないな」

「言っとくけど、私、あんたのこと好きじゃないから。わけ分かんないし。食事にだって、本当は来るつもりなんて、これっぽっちも——」

「でも、来たじゃん」

私はグラスの中の赤い酒を一口飲んだ。

やけに香辛料の味がするサングリアだった。

「まあ、ねえ」

「わけ分かんないのは、そっちじゃん」

男が言う。私は視線を上げた。

「……ですよねエ」

急に可笑しくなって、ぷっと吹き出した。

私の笑顔を見た男も、口元を綻ばせた。

「なあ。君、まだアルカディア3持ってんの？」

男が尋ねるので、私は上着の裾を少し捲って、腰のベルトのピルケースをちら、と見せた。

「使わないんだろ？」

「何度も聞かないでよ」

「じゃあ、なんで持ちあるいてんだよ。新手のファッション？」

男が意地悪な笑みを浮かべる。

私はグラスを傾ける。

すぐに空になってしまった。

「こんなんでもオシャレになるなら、スタイリストは苦労しないよ。私が持ち歩いているのは、そうね、う〜ん……」

無意識のうちに口元を指で叩きながら、何秒間か考える。

答えなんて、一瞬前までは簡単に出てくると思っていた。

それなのに、いざ答えようとすると、ちっとも出てこないのだ。

どうして買ってしまったのだろう。

どうして持ち歩いているのだろう。



憎い敵のはずなのに。

父の仇。

母の仇。

彼の仇。

「俺の父親はさあ、アルカディア3で死んだよ。俺の研究知ってて、わざとそうしたんか知らないけど。嫌味だよなあ」

男はあっけらかんとした笑顔を浮かべる。

つられて私も笑った。

笑えるのは、乗り越えたからだ。

……いや、違う。諦めたから？

それとも、絶望したからだろうか。

もしくは、適当な折り合いを付けてしまったからだろうか。

「私の両親も、アルカディア3で死んじゃったの」

「マジで？ 皆、結構簡単に死んじゃうもんだよな、よくわかんねーけど」

「その理由を調べるのが、あんたの役目なんでしょ？ しっかりしてよ、研究者」

男は笑うのを止めた。

片肘をついて、掌で顔を支える。

明後日の方を見て大袈裟な溜息を一つ。

「まあ、そりゃそうなんだけどさ。でも、いくらやっても、俺にはやっぱりわかんねーのよ。机の上でいくらそれらしい答をはじき出したってさあ——いや、理屈じゃ分かってんだけど、なんだか……」

「仕方ないよ。死んだ人間じゃなきゃ、死ぬ瞬間の本当の気持ちなんて分からないんじゃないの」

先ほどのウェイターが前菜の皿を腕に乗せやって来たので、私たちは黙った。

ウェイターは過剰なほどの慇懃さで頭を下げ、渋い低音の声で端的に料理の説明をした。

ウェイターが背を向けると、男が言った。

「分からないなんて——研究者の前でそれを言うなよ。虚しくなるじゃん」

男は口元を持ち上げて片手を上げた。

おどけたその様子は、全然虚しそうには見えなかった。

少し酔ったようだ。

男の顔が、霞掛かったように白くぼやけていた。

料理が美味しかったせいもあってついついアルコールも進んでしまい、男は代行車を呼んだ。途中で下してもらおうつもりだったのに、なぜか気付いたときには私まで一緒に男の家に来ていて、結局その夜も男と寝てしまった。

どうして流されてしまうのか、自分でもよく分からない。

私はこの男がむしろ嫌いだったのではなかっただろうか？

——いや、多分食事に来ている時点で、私はこの男が嫌いではなかったのだろう。

見た目が好みなわけでもないし、取り立てて気が合うような気がしたわけでもない。

だから、それがなぜなのかは自分でも分からないのだけれど。

隣で男が寝息を立てている。

私は暗がりの中、上半身を起こして煙草を吸っていた。

煙草の火を捻り消すのすら面倒なほどに気だるい。

カーテンを閉め忘れた窓からは、青黒い街の所々に灯る小さな電燈が幾つも見えた。

空気のせいなのだろうか、時折消え入りそうにちかちかと揺れる。

その度に、呼応するかのように私の意識までふっと遠退いた。

突然、寝ていたと思っていた男の手が、私の腹に触れた。

声は出さなかったものの、驚きで身体中の筋肉が、一瞬ビクリと引き攣った。

男はそのまま私の横腹に手を回し、指先に少し力を入れた。

軽い圧迫感が掛かる。

そして、微かに溜息を漏らした。

「何？」

私は尋ねる。

「……」

男は答えず、ただ息の漏れる音だけがやけに大きく聞こえる。

彼の固い指先がやけに冷たい。。

「寒いの？」

男がああ、と間延びした声で答えた。

「——君の腹はあったかいなァ」

「そりゃ、ロボットじゃないもの。体温くらいあるわよ」

男は身体をずらして近寄ってきて、そのまま私の胸を抱きかかえ、鼻を擦り付けるようにして腹の肉に顔を埋める。

「ちょっと、くすぐったいから」

私は笑いを押し殺して身を振る。

男は何も言わない。

「やめてよ」

「生きてりゃ、美味しいものだって食えるし、気持ち良いことだってできんのかな」

「え？」

男の腕に力が籠る。

「何で皆、死んじゃうんだろ」

「研究だか知らないけど、しつこく考え過ぎ。まだ酔ってんの？」

私は笑って、短くなった煙草を揉み消した。

「頼むから――君までアルカディアへ行くなんて、言い出さないでくれよ」

「え、何？」

私は男を見たが、男の顔は、髪と私の身体に挟まれて見えなかった。

「いくら御大層な名前がついてたって、あんなもの、嘘っぱちの理想郷だ」

男が掠れた声で呟いた。

突然何を言い出すのだ。

私は鼻を鳴らして笑うのを止めた。

「……そんなこと、言われなくたって分かってるよ」

「それなら良いんだけど」

「やめてよ。その言い方、まるで死のうとしてる私を止めてるみたいじゃん。私にそういう気は更々ないって、何度も言ってんでしょ」

「……」

男がクッ、と喉を鳴らした。

泣き出したのかと思ってぎょっとしたが、すぐに、ただ笑いを噛み殺しているだけだと気付いて、殴ってやろうかと思った。

「からかったわね」

「……ジョークだよ。でも、約束してくれる？」

私は呆れて、二本目の煙草に火をつける。

どこまで本気なのか分からない。

「――ねえ、あのさ……」

呼びかけてみたが、返事がなかった。

自分から問いかけておいて、私の返事も待たずに既に男は寝息を立て始めていた。

もしかしたら、私の答えなんてどうでも良かったのかもしれない。

やはりからかわれているのだ。

「なんなのコイツ」

私は中途半端な気持ちのまま、宵闇の部屋に取り残された。

明日も仕事だというのに、どうしてもなかなか寝付けない。

そんな日々が、かれこれ3年は続いている。

ただベッドの中で悶々としているわけではないが、取り立てて重要なことをしているわけでもない。

本を読んだり、ネットサーフィンをしたり、映画を見たり、音楽を聴いたり……と、たわいもない些細な趣味の時間を過ごしているだけだ。

自由な時間をもったいなくて眠れない、というほうが正しい表現かもしれない。

もちろん、睡眠は素敵な生理現象だ。

ただ昏々と眠るのも良いし、夢を見るのもまた楽しい。

明け方の夢の中では予想もつかないような物語が展開されるし、時には忘れ去っていた遠い過去の記憶が夢に乗じてふっと蘇ってくる。

はたまた目覚めの瞬間に、意外なところから転がり出てきた自分自身の知られざる側面に驚き、新鮮な気持ちになったりもする。

夢を通して、脳という組織の情報蓄積庫の複雑さ、深さを思い知らされる。

恐らく、私のつまらない現実の日常などよりも、夢の中の方が何倍も楽しいに違いない。

しかし、それでも私は睡眠時間をもったいなく感じてしまう。

欲しいのは、エンターテインメントではないのだ。

多分、私はいつも、人生に対して妙に切羽詰っている。

だから睡眠時間すらもったいなく感じてしまうのだろう。

私にとって、時間というのは“今”しかないのだ。

明日なんて当てにはならない、と不安になってしまう。

確実なのは、今現在、この瞬間だけなのである。

瞳を閉じて眠りに落ちて、外界をシャットアウトしてしまったら、もうその続きなんてあるんだかないんだか分からない、という恐怖心が常に心のどこかに潜んでいる。

普段は忘れていたのだが、暗闇の中ぼんやりと天井を見上げていたりすると、途端にその恐怖がにじり寄ってきて、思わず枕元の照明のスイッチを押し、読みかけていた本をお守りのように引き寄せてしまう。

そしてまた眠れない夜が始まるのだ。

その日も私は眠れずに、リビングのソファに横になり、パジャマ姿でパッドを弄り、インターネットで情報サイトを眺めていた。

部屋の中は心地良く暖房が効いていて、薄手のパジャマ一枚でも寒くはない。

しかしそれでも時折窓の方からガラス越しの冷気が漂ってきて、密かに私の身体を冷やしていく。

熱いお茶でも淹れようか。

そう考えていた矢先だった。

真夜中だというのに、玄関のベルが焦ったように何度も鳴った。

読んでいた本から顔を上げる。

離れた玄関の気配を窺うように、今は閉じられているリビングのドアを凝視した。

もちろん透視能力があるわけではないので、いくら睨んだところで壁の向こうは見えない。

ケンなら鍵を持っている。

家の中には私一人。

少し不安になりつつ、足早に玄関へ向かう。

防犯カメラのモニターを確認すると、ベルを鳴らした犯人はデコだった。

ベルの主が判明したことで緊張は一気に緩んだが、しかしモニターの中のデコはなぜか酷く落ち着かない様子でモゾモゾしていて、それを見た私の心にはまた別の不安が押し寄せてきた。

「どうしたの」

セキュリティを外すと、デコが勢いよく飛び込んできた。

「エーコさん！ どうしよう、どうしよう……」

「一体なんなの？」

酷く興奮気味のデコの肩を押さえて静かに諭した。

デコはぎゅっと目を瞑り、苦しそうに何度も深呼吸を繰り返した。

その様子を見て、私は益々不安に駆られた。

絶対に良い話でないことだけは確かだ。

デコの顔色は真っ青で、白目の部分が充血していた。

「エーコさん……ケンがァ」

そらきた。

私は、今度は自分自身に落ち着け、落ち着けと言い聞かせ、デコを見つめて頷いた。

「ケンがどうしたの」

「死にそうなんすよォ」

それだけ聞けば充分だった。

部屋にUターンして大慌てでパジャマを脱ぎ捨て、ジーパンに足を突っ込んだ。

外では既にデコがバイクに跨って、私を待っていた。

しかし錯乱しているデコに運転させるのは危険だと思い、運転は私がすることにした。

とはいえ、表面上では努めて冷静を装ってはいるものの、私だって内心酷く動揺していたのだが、それでも神経の細いデコに任せるよりはいくらかはましだ。

「ああ、どうしよう。嫌だよ。ケン、死ぬなよォ」

熱に躰されたかのように、私の背中でデコがぶつぶつ呟いている。

それほどケンは酷いのか。

膨れ上がる不安。それはどこまでも膨張していくようだった。

バイクのヘッドライトに照らされたアスファルトを睨みつけ、ともすれば叫び出してしまいそうな程に興奮している自分を落ち着かせようと、まじないの言葉を反芻するように「落ち着け、落ち着け」と何度も心に言い聞かせたが、さしたる効果はなかった。

ケンが収容されているのは、家からバイクで20分程のところにある大学病院だという。

この地域では一番設備が整っている病院である。

普段はもっと近くにあるS病院に行くのであるが、恐らく、S病院では対処できないほど酷い状態なのだろう。

そんな予想をしてしまい、心臓が益々嫌な具合に高鳴った。

真っ暗な道。

橙色の街頭に、時折すれ違うトラックや乗用車がほの明るく照らされている。

すれ違い様の煽り風に、吹きさらしになっている頬が痛いほどに冷やされる。

日中は有料である病院の駐車場は、夜間は開放されていた。

夜間に病院を訪れるのは、緊急患者とその家族ぐらいである。

まさか、憐れにうろたえ焦燥している患者の家族から小金を奪り取ってイライラさせるほど、病院だって気が利かないわけではない。

デコがバイクのキィを外している間にも、既に私は走り出していた。

「エーコさん！ 一階のBフロアっすよ！」

後ろからデコが怒鳴った。

夜の病院は静かだ。

入院患者の部屋は、Aフロアの4階以上にあるので、それ以外のフロアは全く人気がない。

一階も、入り口付近に常駐のガードマン・ロボットが立っているだけだ。

廊下を歩いていると、自分の足音だけが異様に遠くまで響く。

緊急避難指示灯の緑色の明かりと、膝の辺りに一定間隔で点る橙色の間接照明のみだったが、壁も床も天井も真っ白なので、薄暗い割には歩きやすかった。

集中治療室への案内は、廊下の至るところに貼ってあった。

私はただ、壁の矢印の指示に従って突き進めば良い。

何度も右折左折を繰り返してやっと、灰色の廊下を切り取るように漏れる集中治療室の光に辿り着いた。

ドアの前で何度も深呼吸して、忙しい呼吸を落ち着かせる。

指先が悴むほど寒いというのに、額にはうっすらと汗をかいていた。

それを手の甲で拭い、インターフォンを押す。

すぐに若い女の声で応答があり、私がケンの姉であること告げると自動扉がすっと開いた。

短い廊下を挟んですぐに曇りガラスの自動ドアが見える。

そのドアを抜けると両サイドの壁から勢い良く空気が吹き付けられ、次に天井から霧のようなものが噴射された。

抑揚のない機械音声が流れ、十秒間それに包まれるよう指示してくる。

消毒の臭いが鼻についた。

消毒機からすぐのところに、清掃用具入れのロッカーのようなものがあり、集中治療室へ入るための手順が書かれた紙が戸に張られていた。

それに従い両手を正方形の機械に入れて消毒し、ジャケットを脱いで、代わりにロッカーの中に収納されていた妙な服を着た。

大きなお椀を逆にしたような形のプラスチックの帽子。

そこから、床まで届く長さの透明なビニルのシートがぶら下がっている。

シティ指定のゴミ袋を、頭からすっぽり被っているのと大差ない。

唯一服らしいと言えるのは、腕の部分が袖と手袋をつなげたような形になって袋から飛び出ている点ぐらいだろうか。

着替えているうちに若い看護婦がやって来た。

こちらへどうぞ、と囁くような声で私を誘導する。

彼女は既に、嚴重に消毒されているらしい。

私のような滑稽な格好はしておらず、普通の看護婦の制服だった。

ロッカールームの奥には、壁に幾つもの小部屋があって、患者の入っている部屋はカーテンで見えないように仕切られていた。

それが、細長い廊下の両脇に、ずらりと10部屋程並んでいる。

死にかけている者ばかりの部屋。

その一つにケンが収容されているのかと思うとぞっとした。

「こちらです」

看護婦が奥から2番目の小部屋のカーテンを開けて振り返るので、小走りにその後を追った。

小部屋に入ると、明らかにケンの友人らしい少年たちが、打ち沈んだ表情で並んでいた。

明らかに、というのは見た目の問題で、何と言うか——『酷いファッション』なのである。

『酷い』というジャンルの中でも、本人たちには何らかのこだわりがあるのかもしれないが、とにかく警備員に止められそうだし、清潔で無愛想な病室に全く不似合いであることは確かだ。

彼らのうちの何人かは見覚えのある顔だったが、今は声を掛けるような気にもなれず、目元だけで挨拶した。

ケンの傍らの簡易椅子には、ケンの彼女が座っていた。

俯いて両手で顔を覆い、何かに怯えているようにブルブルと震えていた。

擦り傷だらけの身体。

光の加減で時折チカチカと光る黒いタイトなミニスカートも、ボアのついたカーキ色のジャケットも、ボロボロに擦り切れていた。

それを見てようやく、なぜケンがここに来る羽目になったのか、その理由をまだ自分が知らないことを思い出した。

ベッドに目を向ける。

ケンは肌を土気色にして、白いベッドの上にぐにゃりと横たわっていた。

力なく閉じられた瞼。

死んだ蛙のような、気持ちの悪い顔をしていた。

身体中に様々な機器が取り付けられていて、人体実験でもされているようだった。

「生きてる？」

壁際の少年たちをちら、と見て尋ねると、少年たちは無言でしきりに頷いた。

皆、口元が強張っていた。

「今、丁度麻酔が切れたところです。意識が戻るかもしれませんが、どうぞ」

看護婦が機器をチェックしながら言った。

ケンの傍らに蹲り、その鼻先に自分の顔を持っていく。

近くからまじまじと眺めてみたけれど、生きている気配が感じられない。

しかしそれでも、首筋に指先を当てると、ビニール越しに伝わってくる弱々しい脈拍が、ケンがまだ生きているのを私に教えてくれた。

「ケン、来たよ。……ケン、聞こえる？」

耳元で何度も名を呼んだ。

5回目を口にしたら、やっとケンはうっすらと瞳を開いた。

「ねえちゃん……」

「痛い？」

「……当たり前だろ」



ケンの声は擦れていて殆ど聞き取れなかったので、口の動きで言葉を読み取るしかなかった。

ケンは笑おうとしたようだったが、顔が歪んだだけだった。

「もう、いいよ。寝てな」

ケンは微かに頷いて、瞳を閉じた。

「お姉さん。ちょっとよろしいですか」

医師が私を呼んだ。

どきりとして、素早く立ち上がる。

廊下へ出るまでの数歩の間に、私はこう考えた。

絶望を告げられるより、自分で悟って尋ねる方がマシだ。

最低ラインを想定して臨めば、その方がショックは少ない。

「まずいんですか」

先制攻撃を仕掛けると、案の定、医師は険しい表情で頷いた。

「あまり良くはないですね。どういう状況か、お聞きになりました？」

「何もまだ」

私は首を横に振る。

「酷い骨折です。背骨に大きなヒビが入っています。更に頭も打っていて、こちらはまだ精密検査までできていませんが...それから、脾臓も破裂、右の横腹と太腿が裂けていまして、出血が酷かったのですが、現在は止血して、輸血をしています」

「はあ.....」

医師の表情は硬い。

「ケンさんの状態は、正直なところ最悪です。今繋がれている機械、ありますよね？ しばらくはあれを付けていないと、生きていけません。どこまで回復できるのか.....いえ、そんなことを言うと期待させてしまいますね。回復以前の問題かもしれません。.....言い難いことですが、今のところ7：3の割合ですね」

「それって――言い難いってことは、『7』の方が、死亡する確率ってコトですか？」

医師は、一瞬言葉に詰まった。

「――ええ、まあ.....しかし、快方に向かう確率も3割は残っているのです。あとはケンさんの体力と回復力次第ですが。彼は若いから、きっと.....お姉さん、気をしっかり持って下さい」

「あ、ええ。はい。.....大丈夫です」

「しかし、申し上げ難いことが、もう一つあるのですが.....」

まだあるのか。

しかし、既に死が近いと宣言されているようなものである。

死より低いランクはもうないので、デコがうちに飛び込んできた時よりはだいぶ落ち着いて聞くことが出来た。

「もう一つ、ですか？」

医師は、視線を床に落とし、鼻からすん、と息を漏らした。

言い難いことを言わねばならない職業は大変だ。

しかし、そこはプロである。

割り切ったように、明瞭な口調で現状を正確に述べた。

「ええ、背骨を損傷していますし、頭も打っていて身体もかなりあちらこちらやられていますので。恐らく、もし助かったとしても……もう、普通の生活に戻ることは……」

医師はそこで言葉を止めた。

しかし、例えダイレクトに伝えるのを回避したところで、悲劇的な状況を知ってしまった家族のショックは和らぐことはないだろう。

医師もそれは分かっているはず。

分かっているが、止めてくれるのだ。

恐らく彼は、それが医師としての優しさだ、と信じているのだろう。

それだけでも私はこの医師に好感が持てた。

「――そうですか」

「身体が動かなくなるかもしれません」

「人工の物に切り替えられないんですか」

「精密検査がまだなので何とも言えませんが、脳をやられているとすれば、接続用の改造は困難です。恐らく、身体の方にも適応できないでしょう。まあ、それ以前に、その……サイボーグ化は、お金がとても掛かりますし……保険外になりますよ」

そりゃ無理だ。

私は溜息をついた。

しかし、死ぬよりはずっとマシだ。

生きていれば、きっとどうにかなる。

医師の言葉は、まるでアルコールを飲んだときのように、壁一枚隔てた向こう側から聞こえてくるようだった。

全てが夢の中の出来事のように現実感を感じられない。

自分は今、実はこの場にはいなくて、遠い場所からモニター越しにもう一人の自分自身を観察しているのではないだろうか。

そんな風に思えた。

後からやって来たデコが、入り口のカーテンの隙間から心配そうな顔でこちらを見ている。

私は医師に軽く頭を下げて、小部屋へと戻った。

「エーコさん、ドクターは何てー」

尋ねるデコの方を、私はちらりと見た。

私と視線を交えると、途端にデコは口を噤んだ。

「お姉さん……」

キィの高い声が私を呼んだ。

振り返ると、ケンの彼女、メリッサが私を見ていた。

「ごめんなさい」

泣き腫らした目元。

メリッサは涙を堪えようと必死に歯を食いしばっていたが、無駄な努力だった。

涙は次から次へと毀れ出る。

彼女はしきりに手の甲でそれを拭っていたが、擦りすぎた瞼が腫れあがっている。

「私のせいよ。私のせいだわ」

「そんな風に言わないで」

私はメリッサを抱き寄せた。

ビニルシートの下の髪が揺れて、顔の周辺にある通気口から、果物のように甘い、恐らくシャンプーの匂いと、砂埃っぽい乾いた匂いがした。

近くで見ると、髪には落ち葉の切れ端や小さなゴミのようなものが、幾つも付着している。

彼女の髪はドレッドだったので、髪に絡まって、消毒時に吹き付けられる強烈な風でも飛ばし切れなかったのだろう。

取ってあげたかったが、ビニルの上からでは無理だ。

「仕方なかったんだよ。だから、そんなに泣かないで。ケンは、あんたに責任なんて感じて欲しくないに決まってるよ」

「でも……」

「鼻、出てるわよ」

サイドテーブルからティッシュを持ってきて彼女に渡した。

帽子から垂れ下がるビニルは、顔の部分のところがプラスチックのボタンで開け閉めできるようになっている。

彼女はティッシュを三枚勢い勢い良く引き抜くとビニルの中に難儀しながら突っ込んで、ずるずると鼻をかんだ。

「ごめんなさい」

鼻をかみ終わった彼女が、もう一度呟いた。

私は頷いたけれど、もうそれ以上何も言えなかった。

メリッサが可哀想だった。

しかし、私も限界だった。

なんだか酷く疲れていた。

早くこの場から立ち去って一人になりたかった。

「あんたたち、ありがとう。もう、帰っていいよ」

「……はい」

少年たちは、後ろめたそうな視線をケンに送りつつ、一人、また一人と病室から出て行った。  
医師と看護婦も出て行った。

デコと私、そしてメリッサだけが残された。

「メリッサもお家へ帰って、ゆっくり休んだ方がいいよ」

メリッサは私を見て、首を横に振った。

「ここには駄目ですか」

「……一度、家に帰りなよ。多分、面会時間もそう長くはないだろうから。ゆっくり休んでから、またおいで」

「でも、ケン」

「あんたが身体を壊しても、ケンは良くはならないよ。きっと大丈夫だから、ね。私、もう少しここに残ってるから」

暫く逡巡した後、メリッサは唇を軽く噛んではい、と頷いた。

言った側から、またぽろぽろと涙を溢し始める。

彼女はそのまま部屋を出て行った。

その細い背中を見送って、私は自分の頬に触れてみた。

何も無い。

涙が出ない。

悲しいはずなのに、涙が出ない。

ケンを見る。

相変わらず、生気のない顔をして眠っている。

いや、眠らされている。

今機械を止めればケンは死ぬ、と医師に言われたばかりではないか。

起きるのだろうか。

それとも、このままずっと、眠り続けるのだろうか。

深い眠り。

アルカディアへと続く眠り。

――私を置いて行ってしまおうのだろうか。

「エーコさん」

デコに呼ばれて、はっと自分を取り戻す。

「大丈夫っすか」

「大丈夫なわけないよ。すごい疲れてるに決まってんじゃん」

「なんか飲みます？」

「そうね、一服しようか」

歩き出そうとしたら、急に軽い眩暈がした。

倒れるかと思って、慌てて壁に手を延ばす。

額に手を当てていると、気付いたデコが走り寄って来て、私の肩を支えてくれた。

「……ごめん。ありがとう」

「何言ってんすか。俺に捉まって歩いて下さいよ」

「もう平気よ」

「いいから。エーコさんまで倒れちゃったら、大変だし」

デコは笑顔を浮かべた。

疲労が溜まって充血した目元に、無理矢理貼り付けたような笑顔だった。

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

集中治療室用の宇宙人みたいな服を脱いで、喫煙所へ向かう。

喫煙所には誰もいなかった。

デコと二人、長椅子に腰掛けて煙草に火をつける。

廊下は暗い。

喫煙所にだけ、陰気な色の白熱灯がぼつんと点っている。

しかし小さく弱々しい照明なので、あってもなくても同じなのではないか、と思えるほどの薄暗さだった。

代わりに、どこに置かれていても派手に自己主張している飲料の自動販売機の遠慮ない電灯の光が、ちくちくと目を刺した。

ポケットから煙草を取り出し啜える。

火をつけようとしたが手元に力が入らない。

舌打ちをして何度か試したが、やはり駄目だった。

自分が思っているよりも心のダメージは大きかったようだ。

呆然としてライターを握った手を腿の上に落としたら、見兼ねたデコがつけてくれた。

「……意外なところで、心と身体って繋がっているんだよね」

「そうっすね」

苦い煙を思い切り吸い込んだ。

溜息を覆い隠すように、煙を勢い良く吐き出す。

「何時？」

「えっとーもう三時過ぎ」

「私まだ、なんでこうなったのか、聞いてなかったのよね。理由」

デコはあ、と間抜けな声を出し、すみません、と頭を垂れた。

「ああ。言うタイミング、逃してました」

「教えてよ」

「……俺たち、皆で遊びに行く約束してたんです」

「どこへ？」

「別に、場所は決めてなかったんすけど。とりあえず、いつも通りに、マクナレス・ストアの角で待ち合わせしてて、ケンメリッサを後ろに乗せて、約束の時間よりちょっと早く、集合場所に着いてたんです」

デコは煙を長く吐き出しながら、短くなった煙草を揉み消した。

「そこに居眠り運転のトラックが、車線を外れて突っ込んできて……メリッサが、丁度車道の近くに立ってて、でも、トラックの方角に背中を向けてたから、気付くのが遅くなって。ケンの奴カッコつけて、メリッサを守ろうと、突っ込んで行って……」

運が悪かったとしか言いようがないっすね。

最後にデコがポツリと呟いた言葉に、私は舌を打つ。

運、か。

嫌な言葉だ。

でも人間の一生なんて、半分以上が運まかせみたいなものだ。

悲しいけれど、それが現実。

「――そう。そうね」

それきり、会話は途切れる。

自動販売機のコンプレッサー音だけが響いている。

意識を混濁させる、悪魔の吹き掛ける吐息のようだ。

疲れて眠いような気もするのだが、しかし眠れない。

意識は朦朧としているのに、妙に目と耳は冴えている。

何も考えたくないのに、それでも何かを考えようとしてしまう脳。

しかし、何について考えようとしているのかすら不明だ。

ただ、気持ちの悪い焦燥感だけがどんどん膨らんでいく。

気がつけば私の右足は、落ち着きなくしきりに貧乏揺すりをしていた。

「エーコさん……ホント、大丈夫っすか？」

デコが私の右膝に力を込めて手を置いて、貧乏揺すりを止めようとした。

眉根を寄せて私を見ている。

「……うん。取りあえず、貧乏揺すりは止まったみたい。ありがとう」

私は笑ってデコの手を握った。

冷え切った私の手よりも更に、デコの指先は冷たかった。

「……私、どうしたんだろう。凄く辛いはずなのに、涙も出てこないのよ」

呟いたその言葉は、半ば独り言だった。

涙どころか、辛いとか悲しいとか、そんな気持ちすら湧いてこない。

ただ「どうしたらいいのだろうか？」という疑問と不安だけが、春先の海に沸く気持ちの悪い海月のように、ぶよぶよと心に浮かんでいる。

落ち着かない。

しかし、気分が沈んでいるわけでもない。

そういえば、両親の葬式の時も同じような感じだった。

心が病んでいるのだろうか。

それともただ、素直じゃないだけなのだろうか。



デコが首を振った。

「あんまり気にしない方がいいですよ。涙なんて、無理に出さなくても」

「そうだけどさ。なんか、気持ち悪いじゃない」

「そうですか？」

「そうよ、気持ち悪いわよ。腑に落ちない感じ」

「……俺は別に、どーでも良いと思うけど、そんなこと」

「あ？　なんか言った？」

握った手に力を込めて軽く睨みつけると、デコは困ったような顔でイタイイタイと大騒ぎした。

「嘘です嘘です」

私は表情を緩めて少し微笑んだ。

「ありがと。気持ちがちょっと落ち着いてきた」

デコは肩を竦めて頷いた。

「そんなら良かった」

いつの間にか、自販機の音が止んでいた。

もう一度ケンの顔を見てから帰りたかったのだけれど、看護婦に今夜はもう無理だと断られてしまった。

仕方なく、後ろ髪を引かれつつ病院を出る。

帰りはデコのバイクの後部シートに座った。

シートは冷えていて霜が下りていた。

行きは私よりも錯乱していたデコだったが、今は私の方がまいっている気がする。

女の方が感情に脳を支配されやすい、という話を思い出し、悔しくなった。

帰宅すると、眠れない自分を宥めすかし、うつらうつらと数時間寝た。

目が覚めるとすぐ、小さなバッグに適当に荷物を詰めて病院へ行く支度をした。

デコに送ってもらおうかとも思ったのだが、昨夜の大騒ぎを思い出し、携帯に伸ばしかけた手を止めた。

そもそもデコは朝が弱いのである。

しかも疲れ果てて眠っているところをわざわざ起こすのも心苦しい。

諦めてメトロに乗った。

お腹がすいていたので、途中の自販機で缶入りのコーンポタージュスープを買った。

冷えていた身体に染み込んでとても美味しかったが、ストレスのせいかなし不調な胃がシクシク痛んだ。

一夜明け、改めて目にしたケンの様子は、昨夜よりも酷いようだった。

薬で意識がとんでいるせいかもしれない。

相変わらず、肌の色は土気色。

瞼がうっすら開いていて、そこから白目が覗いている。

死相が出ているとでも言うのだろうか、我が弟ながら、吐き気がするほど気持ち悪い顔になっている。

本当に、別人のようだ

顎の辺りに無精髭が伸びてきていて、その中途半端さが却って凄まじい。

見ているこちらが苦しくなってくるような、そんな様子だ。

「どんな具合ですか」

看護婦に尋ねるとはっきりしない答えが返ってきた。

「ええ……あまり」

変わりがない、ということか。

それとも芳しくない、ということか。

しかし、突っ込んで聞くのも憚られて私はただ俯いた。

面会時間は短い。

十分ほどで集中治療室を出る。

看護婦に、緊急患者の家族用の特別待合室を案内された。

小さな部屋で、既に八人ほどの先客がいた。

一様にやつれた暗い表情で、私が部屋に入った瞬間、洞穴のような瞳が一斉に私を射た。

ぞくりと寒気が走った。

「……お邪魔します」

私はもともと小声で呟き、端の椅子に腰掛ける。

照明はついているし広い窓もあるのだが、部屋の中は薄暗く感じられる。

気分の問題なのだろうか。

心臓が高鳴っていた。

この場所が異様に怖かった。

ここにいる全員が、生死の境を彷徨っている患者の家族なのだ。

「あなたさんとこは、どうなすったかね」

しわがれた声に振り向くと、隣の椅子に腰掛けた白髪頭の老婆が、私を覗き込んでいた。

「――弟が」

「おや、そうかね。うちは倅だよ。まだ三十六の働き盛りで、これからだってのに」

老婆の話は止まらない。

倅の職業はコンピュータ技師で、ナントカのカントカを発明したとか、近頃のワイドショーの話題はどうだとか、三階のカフェテリアのドリアはまあまあ美味いとか、そんな凡そ緊急治療室とは関係のない話題が殆どだった。喋ることで、不安を追い出そうとしているようだ。

私は聞いている振りをして頷いていたが、視線は始終床に落としたままだった。

しかし、老婆は私の態度などお構いなしで、延々と喋り続けている。

「だから、さあ。あいつが死んだら、誰も相続する奴がいなくなるだろう。そしたら、俺らのほうにも入ってくるってわけよ。今のうちから弁護士を――」

耳にこっそりと入り込んできたのは、私とは部屋の反対側に座っている中年男性3人の会話だった。

まだ患者が死んでもいないというのに、もう遺産の話をしている。

啜り泣き。

壁際で、髪はぼさぼさで化粧もしていない女が、呆然と立ち尽くして泣いている。

耳を塞ぎたくなった。

なんて所だ。

最悪だ。

気分が悪くなる。

私の様子がおかしいことに老婆が気付いたようだった。

「大丈夫かね」

肩に皺だらけの手を置かれ、私は弱々しく微笑んだ。

「ええ」

老婆は恐らく、私が患者を心配するあまり気が滅入っているのだ、とでも思ったのだろう。何度か頷いたきり黙ってしまった。

私は持参してきたウォークマンのヘッドフォンを耳に宛てる。

その上から更に掌で耳を塞ぐように抑え、大きく俯いた。

前のめりになって膝上に乗せた両肘に、自分自身の貧乏揺すりが伝わってくる。

ヘッドフォンに指輪が当たって、カチカチと小刻みに鳴った。

大音量で鼓膜に響く、オルガンと低いベースの音。

貧乏揺すりと同調するドラムの音。

そして男性ボーカルの陰気な声が叫ぶ汚い言葉。

私の世界はそれが全てとなった。

どれくらいの時間、音の中に沈み込んでいただろうか。

ドラムのリズムの向こう側から、分を呼ぶ声が聞こえたような気がして、私は我に返った。

顔を上げると、デコとメリッサ、そしてケンの友人たちが立っていた。

「エーコさん。ずっといたんすか」

「うん……今、何時？」

ヘッドフォンを外しながら尋ねると、デコの後ろに立っていた少年が、素早く携帯電話の時計を見て「もう5時です」と答えた。

幾重にも巻いた腕のシルバーアクセサリーが揺れて触れ合い、じゃらりと音を立てた。

「さっき看護婦に聞いたら、また面会できるそうなんで、俺ら行って来ますけど。エーコさん、どうします？」

「……悪いけど、あんたらに任せて良い？」

「疲れてませんか？」

メリッサが言う。

私は首を横に振った。

「まだ大丈夫」

「俺たち、交代しますよ。帰って、休んで下さい」

デコが言うので、素直に甘えることにした。

これまでずっとべちゃくちゃ喋り続けていた中年男性3人は、奇妙なファッションの若者たちを見るなり、ぎょっとしたような顔をして口を閉じた。

私の隣にいる老婆は、可愛い孫の顔でも見るかのようにニコニコと微笑んでいた。

「どうも」

私は老婆に頭を下げて待合室を出た。

家に帰らずにあの男の家へと足が向いたのは、一人になりたくなかったからだ。

一人になるのが怖かった。

この妙に高揚したそわそわした気分のままでは、疲れているのに恐らく眠ることすらできないだろう。

私は男の名前をまだ知らない。

しかし、電話番号だけは知っていた。

最初に食事へ行った折、それだけぽつりと書かれたメモをもらったのだ。

携帯電話に登録するときになって名前を聞き忘れたことに気付いたが、とりあえず氏名欄には「コンビニ」と仮登録した。

だが、登録したら名前なことなどまた忘れてしまった。

不便さを感じないと、何をするにも行動が杜撰になって困る。

『もしもし？』

もう電話を切ろうと諦めかけた十度目のコールで、男の声が出た。

「私だけど」

そういえば、私も自分の名前を告げてなかっただろうか……？

『あ、ナイスタイミング。今、丁度家に帰ってきたところだったりする』

男の声は明るい。

漸く日常の切れ端を見つけ出して、私は少しほっとする。

「行ってもいい？」

『おうよ。迎えに行こうか？』

「一人で行けるよ」

病院からはメトロで十分。

路線が一本だったので、思ったよりも近かった。

男の家に着くと、焼いた肉の芳ばしい匂いがした。

「メシ、食べる？」

「うーん、じゃあ、ちょっとだけ」

男はキッチンの中から私の顔をちら、と覗いて、ぴくりと眉を動かした。

「どうかした？」

「何が？」

「疲れてるか、悩んでるか、そんな顔してるような」

「別に……シャワー借りていい？」

「何だい、今日は随分気が早いな」

「違うよバカ。もう眠りたいんだよ」

男は一瞬ぼかんとした表情になったが、黙って頷いた。

熱いシャワーを浴びていると、食事ができた、と男が大声で怒鳴る声が聞こえた。

着替えを持ってこなかったのも、下着と服を脱衣所に適当に丸めて置き、男に借りた「ロックンロールはクソだ」Tシャツを着た。

食事に誘われた日以来何度かこの家に泊まっていたが、その度にこのTシャツが出てくる。既に私のパジャマ代わりになっていた。

野菜と肉の炒め物。

スープ。

それに、ピクルスとコールスローが添えてある。

パンを手に取り、おかずを挟んで食べた。

朝からコーンスープしか飲んでなかったのも、胃の中はからっぽだった。

食欲はあまりなかったが、今食べておかないと後が怖い。

「ねえねえ、疲れてんの？」

男が尋ねてきたが、声だけ聞くと男のほうがよく疲れているように聞こえる。

そう言って笑ったら、男はなんだよ、と言って口をへの字に曲げ、そしてつられたように笑った。

食事を食べ終わった私は、後片付けも手伝わずに勝手に寝室へ引っ込んでしまった。

男のベッドに寝転がる。

枕に顔を埋めて目を閉じ、深呼吸をしたら、会社に連絡するのをすっかり忘れていたことを思い出し、ぱちりと瞼を開いた。

溜め息を一つ。

「……ま、いいや」

恐らく、ミス・ケイトが額に青筋を立てているだろう。

これまでなら、その様子を想像するだけで心拍数が上がって胃が痛くなったものだが、今日は鼻息で飛ばしてしまえそうなほどに気にもならなかった。

ごろりと仰向けに身体を捻る。

天井を見上げていると、今朝見たケンの死んだ蛙のような顔が急に思い出されて、胸が圧迫されるように苦しくなってきた。

窓の外はもう暗い。

寝室の空調はOFFになっていたの、日の入りに合わせて空気が徐々に冷えてきていた。

緩慢な動きで柔らかな布団を引き寄せ、すっぽりと包まる。

自分以外の人間の匂いがする。

ただそれだけで妙に安心できた。

目を閉じれば、今なら簡単に眠れそうな気がする……。

足音がして、ベッドが大きく振動した。

瞼を開くと、すぐ目の前に男が横になっていた。

「レポート纏めるつもりだったんだけど、腹いっぱいになったら、やる気なくした」

「駄目じゃん」

「俺も眠い」

男がそのまま目を閉じてしまったので、私は上半身を起こして、被っていた布団を広げてあげた。

「サンキュ」

仰向けになって、大の字に寝転がっていた男の肩を押して、私とは反対方向へ横に向かせる。

「どうしたの？」

「いいから」

答えをはぐらかし、私は男のシャツを軽く握って、その背中に額を押し付けた。

男のつけている香水が匂って、更に落ち着いた気分になる。

こうしていると、ケンのバイクの後ろに乗っているかのようだ。

目を閉じると、海沿いの道の景色が広がる。

大きなカーブを曲がり、崖から突き出た一本杉の下を通る。

シュミレーションは、男が声を掛けてくるまで続いた。

「俺の背中、渋いだろ」

私は目を開け、舌打ちした。

折角いい所だったのに。

再び目を閉じ、額をぐいぐい押し付ける。

「このまま眠らせて。なんだか、落ち着くから」

くすぐったかったのか、男が微かに笑った。

それが、彼の背中から振動となって伝わってきた。

私はそのまま、一気に眠りに引き込まれた。

昨日の分まで取り戻す勢いで、眠りを貪った。

途中で目覚めることもなく、朝までぐっすりと眠り続けた。

目覚めると、既に男の姿はなかった。

ダイニングへ行くと、テーブルの上に食パンの袋とインスタントスープの箱が置いてあった。

キッチンでコンロに薬缶を掛けて、再びダイニングへと戻る。

ニュースでも見ながら湯が沸くのを待とうと、ソファに腰を下ろしかけた。

が、部屋の隅に置かれたコンピュータに目を留めた私は、中途半端に屈めた腰を再び伸ばした

。

コンピュータは、スクリーンセーバーの画面を映したまま、まだ起動していた。

黒い画面に、時折現れる大きなピストルのアニメーション。

弾が発射される。

画面の左から真っ赤な林檎が出てきて、弾がど真ん中に命中する。

林檎は粉々に破裂し、また画面は暗くなる。

その繰り返し。

コンピュータを消し忘れていったのだろう。

私はコンピュータに近寄って、マウスをクリックした。

スクリーンセーバーが消え、テキストソフトが現れる。

白いウィンドウに、文字が並んでいる。

研究室で取り組んでいる仕事のレポートだろう。

そう思い、取り敢えず保存してコンピュータを終了させようとした。

しかし、その手が止まる。

『11月18日』

日付。

『今日も心は沈んでいる』

これは……日記か。

他人の日記をこっそり読むなんて、悪趣味極まりない。

頭では分かっているのに、視線は逸れることなく画面の文字を追ってしまう。

『毎日こんな研究をして、一体何になるというのか。解明されたからといって、親父はもう戻ってこない。荒んでしまった世の中だって、簡単に良くなるはずもない。いくら後付の理屈で分か



った振りをしてみても、今の自分には不毛な行為としか思えなくなっている。社会が病んでいると思っていたのだが、実は俺自身が病んでいるのかもしれない。なぜならば、今日もアルカディアが頭の』

ピーッ。

葉缶がけたたましく鳴いて私を呼んだ。

その音に我に返る。

キッチンへ戻りスープをいれていると、玄関がガチャガチャ鳴った。

男は既に学校へ行ったものだとばかり思っていた私は、不意を突かれて狼狽えた。

読んだのはほんの数行だったが、しかし量の問題ではない。

大きな後ろめたさが押し寄せてくる。

「あ、起きたの」

キッチンを覗いて、男はいつものへらりとした笑顔を私に向けた。

私は急いでスープの入ったマグカップを手に持ち、男に続いてダイニングへ入る。

男の肩越しにコンピュータを窺い見た。

画面では丁度林檎が破裂するところだった。

私は男の背中であっさり安堵していた。

「朝飯、これから？」

ふいに男が振り向いた。

私はぎこちない作り笑いを浮かべる。

「……うん」

「あそう。俺もまだだから、目玉焼きでも作る？」

「つか、学校行かないの？」

「今日は午後から行きゃいいの」

男は鼻歌を歌いながらキッチンへ行ってしまった。

日記の中の男と、目の前の男の姿。

ギャップの激しさに、わけが分からなくなる。

しかし、普段見せている表情が全てであるような単純な人間なんて、それこそいるわけがない

。

いつもは忘れていたけれど、本当は誰しものが二面性どころか三面だって四面だって持ち合わせている。

そういうものだ。

『今日もアルカディアが頭の――』

男の日記の続きには、どんな言葉があったのだろう。

気になったけれど、とてもではないがもう一度読んでやろうという気にはなれなかった。